

41578

教科書文庫

4
810
41-1934
26000 73195

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

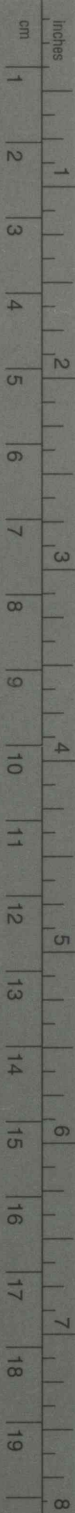


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
昭9

帝國讀本

新制第二版 卷九



室料資

4a
810
BB9

文學博士 芳賀 矢一
文學博士 上田 萬年
文學士 長谷川 福平

編訂 補

昭和五年十一月
島根縣立濱田學校教科書檢印
第五學年第一組
本多三泰

帝國讀本

新制第二版

文部省檢定
昭和九年十一月二日
中學校國語漢文科用

合資會社 富山房發兌



鈴屋の翁
坂内青嵐筆



帝國讀本 新制第二版 卷九

目次

一 春興(朗詠).....	一
二 菅笠日記.....	本居宣長 四
三 新島守その一.....	(増) 鏡 三
四 新島守その二.....	(増) 鏡 一八
五 神武天皇と後醍醐天皇.....	幸田露伴 二五
六 新葉集の歌(自修文).....	大町桂月 三〇
六 大原御幸.....	(平家物語) 三六
七 東洋の詩興.....	夏目漱石 四三
八 一系の天子(俳句新調).....	興 四六

九 國民思想の獨立……………阿部次郎…五

一〇 國學と日本精神その一……………河野省三…三

一一 國學と日本精神その二……………河野省三…三

一二 新たな説を出すこと……………本居宣長…八

一三 新たな説を出すこと……………
 新たにいひ出づる説はとみに人の
 うけひかぬこと……………八二

一四 師の説になづまざること……………八五

一五 わがをしへ子にいましめおくやう……………八七

一六 みくにまなび……………平田篤胤…八七

一七 逆境の恩寵(自修文)……………加藤玄智…九一

一八 御堂關白……………(大鏡)…九二

一九 自覺の徹底……………吉田靜致…九九

二〇 世界の四聖……………高山林次郎…一〇四

二一 東下り……………(伊勢物語)…一三

二二 石彫獅子の賦詩……………薄田泣菫…二六

二三 月草の花……………(増鏡)…三二

二四 千里が竹……………近松門左衛門…三五

二五 教化上より見た近松(自修文)……………藤村作…三四

二六 落花の雪……………(太平記)…三六

二七 芳宜園大人の靈を祭る……………村田春海…四〇

二八 日本文學研究の新意義……………藤村作…四五

三 日本文藝史の概観
 三 漢代の文学
 三 魏代の文学
 三 晋代の文学
 三 南北朝の文学
 三 隋代の文学
 三 唐代の文学
 三 宋代の文学
 三 元代の文学
 三 明代の文学
 三 清代の文学

帝國讀本

新制第二版

卷九

一 春興

春興

(一)唐の詩人は夢得字

野草芳菲紅錦地 遊絲繚亂碧羅天

劉禹錫

もゝしきの大宮人は暇あれや

山部赤人

櫻かざしてけふもくらしつ

山部赤人

春夜

背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春

白居易

はるの夜の闇はあやなし梅の花

白居易

色こそ見えね香やはかくるゝ

凡河内躬恆

納涼

(一)平安時代の文人宇多天皇の第三皇子齊世親王(一五九九年)歿。
 (二)平安時代の宮女宇多天皇の第四皇子式部卿敦慶親王の女(唐の詩人。字は仲晦)。
 (三)第五十代桓武天皇の皇子(二承和元年(一四九四年)薨)。
 (四)平安時代の歌人天曆二年(一六〇八年)歿、年六十。
 (五)平安時代の文人菅原道真の門人(延喜七年(一〇六五年)歿、年六十八)。

池冷水無三伏夏ヤカニ 松高風有一聲秋ウツクニ
 したくする水に秋こそ通ふらし
 むすぶ泉の手さへすゞしき

杜鵑

一聲山鳥曙雲外 萬點水螢秋草中
 さつきやみおぼつかなきを杜鵑

ゆきやらで山路くらしつ杜鵑
 いま一聲のきかまほしさに

八月十五夜

三五夜中新月色 二千里外故人心
 十二廻中無勝於此夕之好キニ
 千萬里外皆爭於吾家之光チ

源英明

中務

許渾

明日香王子

源公忠

白居易

紀長谷雄

あきかきせにのゆの
 はつかかりの
 ねそきかたの
 まつさをか
 けてきつら
 むけつら
 山腰歸雁斜
 虹未展巾新
 はるかすみ
 たつゆを見
 たりの花を
 さとにすみ
 やならへる
 (一)平安時代の文人永観(一〇七四年)歿、年七十三。

水の面にてる
 月なみを

こよひぞ秋の
 もなかなりける

源順

雪似鷺毛飛散亂
 人被鶴鷺立徘徊

白居易

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける
 いづれを梅とわきて折らまし

錢別

紀友則

あきかきせにのゆの
 はつかかりの
 ねそきかたの
 まつさをか
 けてきつら
 むけつら
 山腰歸雁斜
 虹未展巾新
 はるかすみ
 たつゆを見
 たりの花を
 さとにすみ
 やならへる
 (一)平安時代の文人永観(一〇七四年)歿、年七十三。

(筆成行原藤傳)集詠朗漢和

(一)平安時代の儒者、書家、第六十二代村上天皇に仕へた。天徳元年(一六七年)歿。
(二)平安時代の儒者、第六十三代冷泉天皇に仕へた。

(三)江戸時代の國學者、伊勢の人。鈴屋と號した。享和元年(一八〇一年)歿。
(四)明和九年(一七九二年)の著がある。三

前途程遠馳思於雁山之暮雲
後會期遙霑纓於鴻臚之曉淚
おもひやる心ばかりはさはらじを
なにへだつらん峯のしら雲

(一) 大江朝綱
橘直幹

嘉辰令月歡無極 萬歲千秋樂未央
長生殿裏春秋富 不老門前日月遲
君が代は千代にやちよにさざれ石の
いはほとなりて苔のむすまで

源英明
慶滋保胤
よみ人知らず

二 菅笠日記

八日、初瀬を出でし後雨ふらで、四方の山の端もやうくあかり行きつゝ、多武峯のあたりにては名残もなく晴れたりしを、今日も

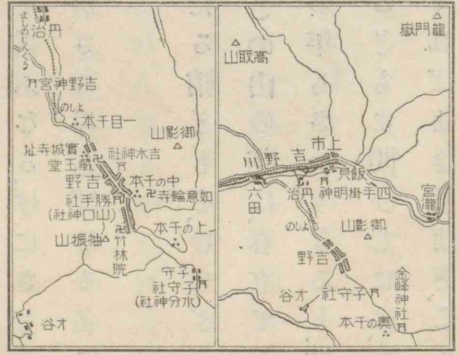
(二) 本居宣長

(一)大和國(奈良縣)吉野郡、吉野川の北岸。

(二)上市の南岸。

またいとよき日にて、吉野も近づきぬれば、けさはいと足かろく、皆人の心行く路なればにや、程もなく上市に出でぬ。この間は一里とこそ言ひしかいと近くて、半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。吉野川、ひまもなく浮べるいかだをおし分けて、こなたの岸に船さしよす。夕暮ならねば渡守は「はや」とも言はねど、皆急ぎ乗りぬ。

あなたの岸は飯貝といふ里なり。さて川邊に沿ひつゝ、少し西に行きて、丹治といふ所より吉野の山にかゝる。やゝ深く入りもて行きて、杉むらの中に四手掛の明神と申すがおはするは、吉野の山口神社などにはあらぬにや、されど、言ふばかりの社とも見えぬ。この森より下にも上にも、このわたりなべて櫻のいと多かるな



多かる限り

心づきなし

むらぎえ

かを、のぼりく、て、のぼり果てたる所、六田むだの方よりのぼる路との行合ひにて、茶屋あり。しばし休む。この屋は、過ぎこし坂路よりいと高く見やられし所なり。此所より見わたす所を一目千本とか言ひて、大方吉野のうちにも櫻の多かる限りとぞ言ふなる。げにさもありぬべく見ゆる所なるを、誰てふをこの者か、さる卑しげなる名は附けけん、いと心づきなし。

花は大方さかり過ぎて、今は散りのこりたる梢どもぞ、むらぎえたる雪のおもかげして、所々に見えたる。抑、この山の花は、春立てる日より六十五日に當るころほひなん、何れの年もさかりなると、世には言ふめれど、また我が國人の來て見つるどもに問ひしには、かのあたりのさかりの程を見て、此所にもものすればよき程よと、これもかれも言ひしまゝに、その程うかゞひつけて出立ちしもしるく、途すがら問ひつゝ、來しにも、よき程ならんと、多くは言ひつる中に、

まだし

かけても

まだしからんとこそ言ひし人もありしか。かくさかり過ぎたらんとは、かけても思ひ寄りざりしぞかし。なほ此所にてくはしく問ひきけば、この二月ふたつきのつごもりがた、いと暖



飛 行 機 上 見 ら か 吉 野

かなりしけにや、例の年の程よりも今年はいと早く咲出で侍りつるを、いにし三日四日ばかりや、さかりとは申すべかりけん。さも雨しげく風吹きなんどせし程に、誠にさかりと申しつべき頃も侍らぬやうにてなん、うつろひ侍りにしと語るを聞けば、その年々の寒さぬるさにしたがひて、遅くも疾くもある事にて、必ずその程と、かねてはこの里人も

(一)吉野金峯山の鎮守金剛藏王権現を祀つてある。

(二)藏王堂を去ること約五〇メートル。一年中(一三六三年)一行修役の角山上修役の庵室であつたと言ふ。後吉野朝の遺跡となり、今吉水神社となつた。かけまくはかしこけれど

え定めぬわざにぞありける。
此所は吉野の里に入る口にて、これよりは町屋たちつゞけり。先づやどりをとらんとて、^(一)藏王堂には參らで過ぎゆく。堂はあなたに向ひたれば、かの門はうしろの方にぞ立てりける。そのあたりに清げなる家たづねて、宿を定めて、先づしばしうちやすみ、物食ひなんどして、今日明日の事ども語らひ、道しるべき者やとひて、先づ近き所々見めぐらんとて出立つ。この借りつる宿は、箱やの何がしとかいふ者の家にて、^(二)吉水院近き所なりければ、先づまうづ。この院は路より左へいさゝか下りて、また少しのぼる所離れたるひとつの丘にて、めぐりは谷なり。後醍醐のみかどのしばしが程おはしましし所とて、おりしまゝにのこれるを、入りて見れば、げにもものふりたる殿のうちのたゞずまひ、よのつねの所とは見えぬ。かけまくはかしこけれど、

(一)後醍醐天皇。
(二)第九十七代。

(三)吉野水分峯。子守(龜)明神と言ふ。

いにしへの心をくみてよし水の
ふかきあはれに袖はぬれけり
^(一)かの帝の御像、後村上の帝の御手づから刻みたてまつり給へると
ておはしますを、をがみたてまつるにも、
あはれ君この吉水にうつり來て
のこる御影を見るもかしこし
またそのかみの古き御たから物ども數多ありて見けれど、悉く
はえしも覺えず。この寺のうちにさゝやかなる屋の、前うちはれて
見わたしの景色いとよきがあるに立ちいりて、煙ふきつゝ見いだ
せば、^(三)子守の御社の山、向ひに高く見やられて、その山にも、かたへの
谷なんどにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青葉がちなるぞ返す
返す口惜しき。さは言へど、奥なる花はさかりと見ゆるもなほ數多
にて、

みよし野の花は日數もかぎりなし
青葉のおくもなほさかりにて

瀧櫻と言ふもかしこにありと教ふ。
咲匂ふ花のよそめはたちよりて

みるにもまさる瀧の白絲

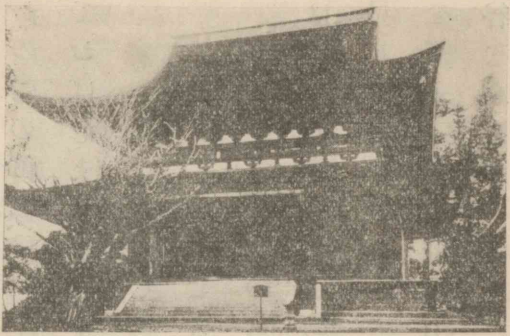
暮るゝまで見るとも飽く世あるまじうこ

王



堂

さて藏王堂にまうづ御とばり掲げさせ
て見たてまつれば、いとく、大きな御
像の、忿れる御顔して、片御足さゝげて、いみ
じう怖しきさまして立ち給へる、三柱おは
する、たゞ同じ御やうにて、けぢめ見え給はず、堂は南向にて、豎も横
も十丈餘りありとぞ。作りざまいと古く見ゆ。前に櫻を四隅に植ゑ



たる所あり、四本櫻ももざくらと言ふとかや。堂の傍より西へ石の階はしを少し下

れば、即ち實城寺なり。本尊の左の方に後
醍醐天皇、右に後村上院の御位牌と申す

塔

もの立たせ給へり。この寺も前の限り藏
王堂の方につゞきて、後も左も右も皆や

尾

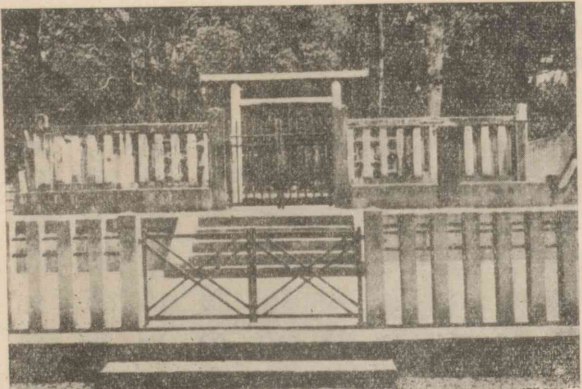
や下れる谷なり。されどかの吉水院より
はやゝ程廣し。この所は、かりそめながら

陵

五十年餘りの春秋を経て、三代のみかど
の住ませ給ひし御行宮みゆきみやの跡なりと申す

はいかゞあらん。事たがへる様なれど、を
りをりおはしましたしなどせし所にては

ありぬべし。今は堂も何も造りあらためて、そのかみの名残ならね
ど、なほめでたく心にくきさま、異所には似ず。この寺を出でてもと



(一)吉野山中の一
峰。勝手明神
の背後にある。

(二)勝手明神の南
金峯山寺の僧
坊。

(三)奈良縣高市郡
同吉野郡龍門
村。

の路に歸り、櫻本坊などいふを見て、勝手の社はこの近き年焼けぬるよし、今はたゞいさゝかなる假屋におはしますを、拜みて過ぎゆく。この社の隣に、袖振山(一)とて小高き所に小さき森のありしも、同じをりに焼けたりとぞ。御影山といふもこのつゞきにて、木しげき森なり。竹林院、堂の前にめづらしき竹あり、一つふしごとくに四方に枝さし出でたり。後の方に面白きつくり庭あり。其所より少し高き所にあがりて、よもの山々見わたしたる景色よ。先づ北の方に藏王堂、町屋の末につゞきて、ものより高く目にかゝれり。なほ遠くは多武の山、高取山、それにつゞきて東北の方に龍門(四)の嶽など見ゆ。東と西とは谷のあなたに間近き山々相つゞきて、かの子守の御社の山は南に高く見あげられ、西北(五)の方に葛城山は、いと遙かに霞の間より見えたるなど、すべてえも言はず、面白き所のさまなり。

花とのみ思ひ入りぬる吉野山

(一)「いざげふは
春の山邊にま
じりな人暮れ
なばなげの花
の蔭かは一古
今集 素性法
師」

よものながめもたぐひやはある
時うつるまでぞ見をる。行くさきなほ見所は多きに、日暮れぬべしと驚かせど、耳にも聞入れず、暮れなばなげの「なんどうち誦して、あかなくにひと夜はねなんみ吉野の竹のはやしのはなのこのもとかくは言へど、行くさきの所も流石にゆかしければ、其所にたてる櫻の枝に、この歌は結び置きて立ちぬ。」

三 新島守 その一

(一) 四月二十日帝(二)おりさせ給ひ春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄(三)の院をば中院と申し、父帝(四)をば本院とぞ

(一)承久三年(一
八八一年)
(二)第八十四代順
徳天皇
(三)第八十五代仲
恭天皇
(四)土御門院
(五)後鳥羽院

(一)近衛基通の子。
(二)後京極良經の子。左大臣。
(三)當時の將軍經。鎌倉にゐた。
(四)後鳥羽院。
(五)鎌倉幕府方。
かつく

おほやけ
北條義時

聞えさする。この程は家實のおとゞ關白にておはしつれど、御讓位の時道(一)家のおとゞ攝政になり給ふ(二)かのあづまの若君の御父なり。さて(三)も院の思し構ふる事忍ぶとすれどやうく漏れ聞えてひがし様にもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふ者あり。かつく彼を御勸事(四)の由仰せらるれば、御方に参るつはものども押寄せたるに、遁るべき様なくて、腹切りてけり。先づいとめでたしとぞ院は思し召しける。

あづまにもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻來りなん時に、はかなき様に屍を曝さじ、おほやけと聞ゆとも、親らし給ふ事ならねば、且(五)我が身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて、都にのぼす。泰時を前に据ゑて言ふ様、おのれをこのたび都に参らするは思

ふ所多し。ほいの如く清き死(一)をすべし。人にうしろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時君の御



後鳥羽天皇

爲にうしろめたき心やはある。されば横様の死をせん事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄箱根は越ゆべし。など泣くく言ひきかす。誠にしかなり。また親の顔拜まん事もいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今や限りと哀れに心

細げなり。

かくてうち出でぬるまたの日、思ひがけぬ程に、泰時唯一人鞭をあげて馳來たり。父胸うち騒ぎて、いかにと問ふに、軍のあるべき様

またの日

とばかり

かしこまりを申す

(一)藤原氏。西園寺家の祖。
(二)將軍賴經の公經の女の出である。

大方のおきてなどは、仰の如くその心を得侍りぬ。若し路のほとりにも、はからざるにかたじけなく鳳輦を先立てて、御旗を揚げられ、臨幸の嚴重なる事も侍らん。に参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。このひと事をたづね申さんとて、一人馳歸り侍りき。と言ふ。義時とばかりうち案じて、賢くも問へるをのこかな。その事なり。正に君の御輿に向ひて弓を引く事はいかゞあらん。さばかりの時は、胄を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしましなから、軍兵を賜はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。と言ひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば、ものゝふども召集へ、宇治、勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意ことなり。公經の大將一人のみなん、御うまごの事もさる事にて、北の方、一條中納言能保と

(一)賴朝を言ふ。

さしいらへ

(二)藤原殖子。後鳥羽天皇の御母。
(三)藤原重子。順徳天皇の御母。

上達部
殿上人

龍馬

いふ人のむすめなり。その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さしいらへもせず、院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、次々數多聞ゆれど、さのみは記し難し。いくさにまじり立つ人々、この外の上達部にも殿上人にも數多ありき。中院はあかで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、斯様の御騒にも、殊に交はらせ給はざめり。新院は同じ御心にて、萬づいくさの事などもおきて仰せられけり。

いつの年よりも五月雨晴間なくて、富士川、天龍などえも言はず漲りさわぎで、いかなる龍馬もうち渡し難ければ、攻めのぼる武者ども怪しく惱めり。かゝれども終に都に近づく由聞ゆれば、君の御

武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきの、しる様、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山に逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなくさわざ満ちたり。いかがあらんと君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたる様ども、たのもしげなし。六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、終に御方のいくさ破れぬ。荒磯に高潮などのさし來る様にて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、言はん方なくあきれて、上下唯物にぞ當り惑ふ。

四 新島守 その二

あづまより言ひおこするまゝに、かの二人の大將軍謀らひおきてつ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれ

(一)京都市の南方
鳥羽にあつた
離宮。城南
宮とも言つた。
今日を限りの
御ありき
(二)「とりかへす
ものにもがな
や世の中を
りしなごら
わが身と思は
入二源氏物語
河海抄

(三)藤原信實



皇 天 德 順
給はんとなり。かくて同じき十三日
姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ
るべき御程なり。信實朝臣召して、御
御ぐしおろす。御年四十に一つ二つ
思さるゝもかひなし。その日やがて
ましよう哀れなり。(三)ものにもがなやと
せ給ふ。今日を限りの御ありき、あさ
や餘らせ給ふらん、まだいと惜しか
るべき御程なり。信實朝臣召して、御
姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ
給はんとなり。かくて同じき十三日

に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、この世の
同じ御身とも思されず、いみじういかなりける代々の報にかと恨
めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日みかどをもお

(一) 秦の第三世子
嬰の孫、四十
六日で沛公に
降り、秦は亡び
た。

御心もて
(二) 高知縣幡多郡
(三) 第八十八代後
嵯峨天皇
(四) 土御門天皇の
御母在子
せうと
(五) 源通子
北面の下藤
召次

ろし奉りき。この四月かよ、御讓位とてめでたかりしに、夢の様なり。七十餘日にており給へるためしも、これや初めなるらん。唐土にぞ四十五日とかや位におはするためしありける。とぞ、唐の文讀みし人の言ひし心地する。それも斯様の亂やありけん。さて上達部殿上人、それより下、はた残りなくこの事に觸れにしたぐひは、重く、軽く罪に當る様、いみじげなり。

中院は初めより知ろしめさぬ事なれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事、いと恐ありと思されて、御心もてその年閏十月十日、土佐國の幡多といふ所に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮出で來給へり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に止め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、召次などば

わりなき事

(一) 續古今集卷十
九に「題知ら
ず、土御門院
御製」とある。

(二) 貞應二年五月

(三) 劫初以來、有
諸惡王、貪國
位、故、殺其
父、二萬八千
人、觀無量壽
經

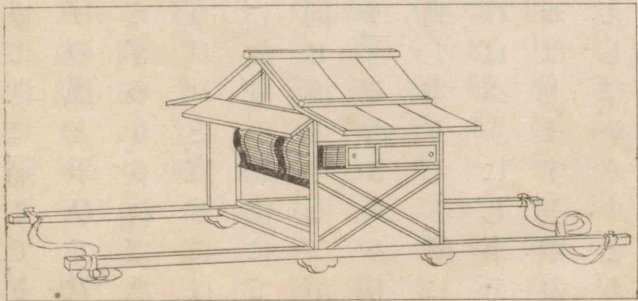
かりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。途すがら雪かきくらし、風吹荒れ、吹雪して、來し方行く先も見えず、いと堪難きに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

憂世にはかゝれとてこそうまれけめ

ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近き程に」とあづまより奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。

さてもこのたび世の有様、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは、父の王を失ふためしだに、一萬八千人までありけり。とこそ佛も説き給ひたためれ。まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を争ひて戦をなす事數へ盡すべからず。それも皆一



輿 手

よせ
きよみ

(一)第六十一代朱雀天皇の御代(一五九七年)
(二)平將門(一五九七年)
(三)朱雀天皇の御代(一五九八年)
(四)藤原純友(一六〇六年)
(五)藤原純友(河天皇の御代(一七五九一七六三年))
(六)源義親(後白河法皇)
(七)藤原信賴(後白河法皇)
(八)藤原信賴(後白河法皇)
(九)藤原信賴(後白河法皇)
(十)藤原信賴(後白河法皇)

あやなきわざ

ふし二ふしのよせはありけん。若しはず異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しのたがひめに世に隔りて、その恨の末などより事起るなりけり。今の様にむげの民と争ひて君の亡び給へるためし、この國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、何れも皆猛かりけれと、宣旨には勝たざりき。保元に崇徳院の世を亂り給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の御門を守り給はする事は強きなめり。とぞ古き人々も聞えし。また信賴の衛門督おほけなく二條院を脅し奉りしも、終に空しき屍をぞ路のほとりに棄てられける。かゝればふりにし事を思ふにも、なほさりともしかでか上皇、今上數多おはします王城の、徒に亡ぶる様やはあらんと、たのもしくこそ覺えしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世一つの事にもあらざらめども、迷

(一)第八十二代後鳥羽天皇

萬機の政

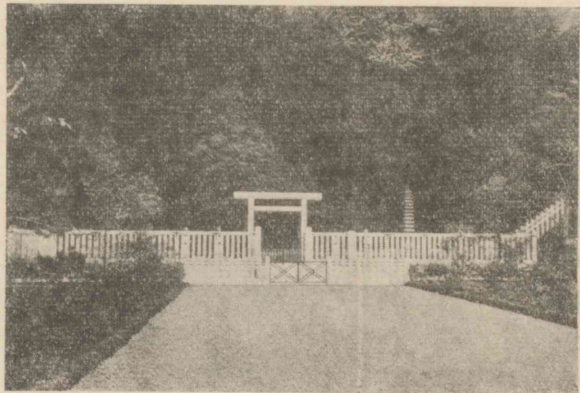
(二)「津の國のこやとも人ないふべきに隙こそなけれ葦の八重ぶき二後拾遺集和泉霞の洞

の愚かなるまへには、なほいと怪しかりし。

(一)六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國の主として萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有様にて、遠きを憐び近きを撫で給ふ御惠、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやの隙なき政を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらん事を思しき。藐姑射の山の峯の松も、やうく枝を連ねて千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても空行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありくて由なき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりくにさすらへ、磯のとまやに軒を並べて、おのづから言問ふ者とは、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、我が故郷のしるべかとは

言ふも愚かなり

柴の庵
故づく
後鳥羽院のお
造りになつた
御殿大阪府
攝津國三島
郡島本村



後鳥羽天皇順天德天皇大原陵

かり、眺め過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたら
んだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて
いつを果とか廻りあふべき限りだにな
く、雲の浪、煙の浪の幾重とも知らぬ境に
世をつくし給ふべき御様ども、口惜しと
言ふも愚かなり。
このおはします所は、人離れ、里遠き島
の中なり。海面よりは少し引入りて、山陰
に片そへて大きやかなる巖の峙てるを
たよりにて、松の柱に葦ふける廊など、け
しきばかりことそぎたり。誠に柴の庵の
唯暫しとかりそめに見えたる御やどり
なれど、さる方になまめかしく故づきてしなさせ給へり。水無瀬殿

小説家、文學
博士。名は成
行。慶應三年
江戸に生れた。
五重塔、風流
佛の著があり、
佛の著があり、
集に収められ
てゐる。
直越とも言ふ。
大阪府河内
國中河内郡
から生駒山を
越えて奈良縣
生駒郡生駒村
に至る坂路
憤懣
大和國鳥見の
酋長。一名登
美毘古。

思し出づるも、夢の様になん。遙々と見やらるゝ海の眺望、二千里の
外も残りなき心地する、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹來る
を聞き召して、

われこそは新島守よおきの海の

あらし浪かぜこゝろして吹け

同じ世にまたすみの江の月や見ん

けふこそよそにおきのしま守

— 増鏡 —

五 神武天皇と後醍醐天皇

幸^(一) 田露伴

申すもいと畏けれど、我が國創業の帝神武天皇、孔舎衛坂の戦に
御兄君五瀬命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚だしく御憤懣あらせ
られ、誓つて長髓彦に天誅を加へんとし給ひし御時は、いかに勇猛

壯烈に大御心の思し給ひしがまゝを、御製に述べ給ひしぞや。

みつくし 久米の子等が 粟生には

かみら一もと そねがもと

そねめつなきて 撃ちてしやまん

と謠ひ給ひ、また

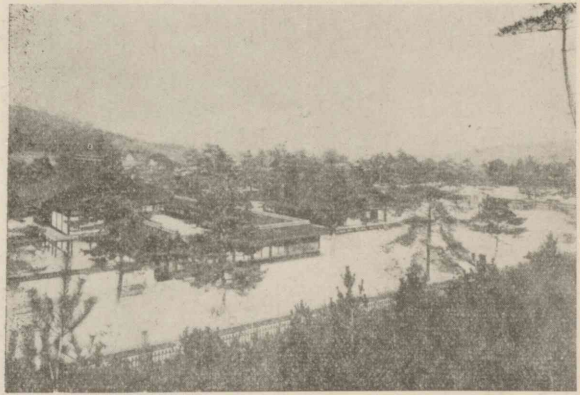
みつくし 來目の子等が

垣本に 植ゑしはじかみ

口ひぐく 我はわすれじ

撃ちてしやまん

宮と謠ひ給へる御威勢の激しき、御心の猛
猛しき、薑を食へば餘味こゝにありて、我
が口こゝに疼む。我が兄既に撃たれぬ。我
が心なほ痛む。忘れんや。く。おのれ醜虜、撃ち屠らではいかでか止



榎原神宮

まん。と、御目に觸れし薑に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし
出で給へる、いさぎよしなど申すも畏き御製なり。
建武中興の帝後醍醐天皇は、これはた申すも畏けれど、英明にわ
たらせ給ひし御門なり。されどその御製の御心御姿は、世の異なる
が爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとは様異なり。

秋ごとのならひと思ひし露しぐれ

ことしは袖の上にぞありける

と詠じ給へる。

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨

おとを聞くにもぬるゝ袖かな

とあそばされたる、臣子の分としては、我が日の本の皇帝のかゝる
御詠ありしかと思へば、恐ながら御傷はしさに涙はふり落ち、かゝ
る御詠のありたるその世いと恨めしく口惜し。

うづもる、身をばなげかずなべて世の
くもるぞつらきけさのはつ雪
の御製は、大御心の深く廣き、愚かなる身にも大凡は推量り奉られ
て、これまた涙止めあへず。

身にかへて思ふとだにも知らせばや
たみの心の治めがたさを

の御製は、聖意いと畏く、恐多き極みの御詠なり。
もの思はで過ぎぬる方の年月は

いかに寝し夜の夢にかあるらん

と懷舊の情を詠み給ひたる、吉野の行宮にていかなるをりにか、
あだに散る花をおもひの種として

この世にとめぬこゝろなりけり

と感慨し給ひたる、同じ行宮にて御風邪めしたる時、

扈從

(一)奈良縣吉野郡
大淀町字比曾



つゆの身を草の枕におきながら

風にはよもと頼むはかなさ

と詠じ給ひたる、御扈從の人々うち續き
身まかりける時、

こと問はん人さへ

稀になりにけり

わが世の末の程ぞ知らるゝ

と御心細くものし給ひたる、吉野にて世
尊寺のあたりの雲居の櫻と名に呼ばれ

たるが咲きたるを御覽じて、

こゝにても雲居の櫻咲きにけり

たゞかりそめの宿とおもふに

と、無限の御恨をいと優しくいひ出で給ひたる、同じ行宮にて、

(一)鳥取縣(伯耆國)東伯郡赤崎の南一トキロメ一トル
 (二)姓は源氏、初めの名は長高、伯耆國名和の
 (三)文學者。名は芳衛。高知市の人。大正十五年、花紅葉、黄菊白菊、著が、あり、等、本文明史等に、べ、桂月全集に、收、め、ら、れ、て、る。

ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて
 袖にはげしき山おろしのかぜ
 と詠じ給ひたる、その他船上山にて名和長年に賜ひたる
 忘れめやよるべも波のあら磯を
 み船のうへにとめしこゝろは
 の御詠の如き、なべて一天萬乗の御製とし思へば、臣子の分として
 は、涙なくては拜誦し参らせ難き御製多し。

— 調言 —

自修文

新葉集の歌

大町桂月

後醍醐天皇の皇子宗良親王、歌に堪能なり。將軍として戦ふ際にも吟詠を廢し給はず。元弘以來弘和元年までの名歌を撰びて、新葉和歌集と題しけるに、長慶天皇これを敕撰に準じ給へり。新

ら長慶天皇の
 弘和元年(二
 〇四一年)ま
 で五十一年間
 (四)第九十八代



雲居櫻

葉集はかゝる次第にて出来たれば、随つて吉野山に關する哀れなる歌も少からざるなり。

こゝにても雲居の
 さくら咲きにけり

たゞかりそめの
 やどとおもふに

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に「雲居の櫻」と稱する櫻あり。雲居は禁中を言ふ。さらでだに舊禁中のこひしくして堪へ給はざるに、吉野山中「雲居」と稱する櫻を御覽じては、豈觀感無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御やどりつひの御やどりとなりて、延元陵畔、永へに游人をして涙襟を潤ほさしむ。

つひの御やど
 最後の御宿
 (一)後醍醐天皇の
 御陵、塔尾陵
 と稱する。如
 意輪寺の近傍

(一)第九十七代

吉野山花も時得て咲きにけり
みやこのつとに今やかざさん
これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土産にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがてまた京都を保ち給ふ事能はずして、再び吉野に赴かせ給ひし時の御失望やいかなりけん。

わが宿と頼まずながら吉野山

花に馴れぬる春もいくとせ

これ長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、事終に御志とかなはざりき。されど知らず、京都は果して御心になかひたる御宿なりしか。この天皇の御母を嘉喜門院と申しまつる。その御歌に、

櫻花さきて疾く散るならひこそ

花に云々
なつた春はど
れ程であらう
か、此所に春
を迎へた。

(二)後村上天皇の
女御

雅懷
風流な心持

(三)二〇三七年

わが身の春のものおもひなれ
昨日は紅顔、今日は白頭、人生の老いやすきは、男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性にょしやうの御身、櫻花の散りやすき様を見給ひて、いかに御身をはかなく思し給ひけん。

故里はこひしくとてもみ吉野の

はなのさかりをいかゞ見すてん

これ新葉集の撰者なる宗良親王の御歌なり。詩人の雅懷みやうを見る。されど散らばまたいかに都のこひしかるらん。
嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へり。されど後村上天皇崩御の後、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を弾き給はざりき。然るに、天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂を張り給ひけるが、樂終りて後、長慶天皇、門院に向ひて一曲をと切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、琵琶を弾き給ふ。その時の御製に、

そのかみ
此所では後村
上天皇御在世
中のこと

御返し

御返歌のこと
普通歌には返
しと言ひ、文
には返りと
言ふ。

君

長慶天皇。

ふきたえぬべ
き

吹絶えてしま
ひさうな。

唱和

互に詩や歌で
問答すること。

(一) 作文の方法を
述べた書。大
正五年東京中
行外社出版部發

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの
秋おもほゆる峯のまつかぜ
昔は父天皇この琵琶を聽きて御心を慰め給ひけん。父天皇今
はおはせず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返し
に

あはれとも君ぞ聽きける今ははや

ふきたえぬべき峯のまつかぜ

「わが餘命いくばくもなし。君が昔をしのぶといふ琵琶の音も、や
がて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首何れも意哀れにして、
詞も妙なり。宗良親王これを評して、古への敕撰集中の唱和に比
して毫も遜色なしとて、これを新葉集に收め給へり。

(一) 作文五十講

六 大原御幸

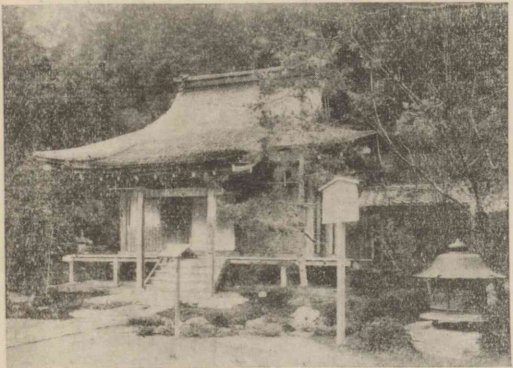
(一) 第七十七代。
(二) 後鳥羽天皇の
御代。一八四
六年。

つら

夜をこめて

(三) 大納言兼雅。
(四) 權中納言源通
親。

(五) 「まがふとて
厭ひし峯の白
雲は散りてぞ
花の形見なり
ける。」續後撰
集、久我太政
大臣



(一) 後白河法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御す
まひ御覽ぜまほしう思し召されけれども、如月、彌生の程は嵐はげ
しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えや
らで、谷のつら、もうち解けず、かくて春
寂過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜
をこめて、大原の奥へ御幸なる。しのびの
光御幸なりけれども、供奉の人々には後徳
大寺、花山の院、土御門以下公卿六人、殿上
院人八人、北面少々さぶらひけり。

(二) 遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形

見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ
惜しまる。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分
入らせ給ふに、初めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡

よしある様

(一)「夏山の青葉
まじりの遅櫻
初花よりも珍
しきかな」
金葉集 藤原盛
秀

絶えたる程も思し召し知られて哀れなり。
西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。舊う造りな
せる泉水、木立、よしある様の所なり。いらか破れては霧不斷の香を
焼き、樞落ちては月常住の燈をかゝぐ。とは、斯様の所をや申すべき。
庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を晒す
かとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉
まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶
間より、山杜鵑のひと聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽
あつて、かうぞあそばされける。
池水にみぎはの櫻ちりじきて
なみの花こそさかりなりけれ
ふりにける巖の絶間より落來る水の音さへゆるび、よしある所な
り。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。

(二)瓢箪屢空、草
滋、顔淵之巷、
藜藿深鎖、雨
濕、原憲之樞、
(和漢朗詠集)
(三)孔子の弟子
字は子思



人稀なる所なり。

さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒にはつた、朝顔はひかゝり、し
のぶまじりの忘草、瓢箪屢空し、草、顔淵が
巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨、原憲が樞を
大濕すとも言ひつべし。杉のふきめもまば
原らにて、時雨も霜も置く露も、漏る月影に
御争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後
幸は山、前は野邊、いさゝ小笹に風騒ぎ、世に
立たぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都
の方の音づれば、間遠に結へるませ垣や、
僅かに言とふものとは、峯に木傳ふ猿
の聲、賤が爪木の斧の音、これ等が音づれ
ならでは、まさきのかづら、青つゞら、來る

いらへ

法皇、人やある、と召されけれども、御いらへ申す者もなし。稍あつて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。と仰せければ、この上の山へ花摘に入らせ給ひて候。と申す。さこそ世を厭ふ御習とは言ひながら、さ様の事に仕へ奉るべき人もなきにや、御いたはしうこそ。と仰せければ、この尼申しけるは、五戒、十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候べき。とぞ申しける。

この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬ物を、結び集めてぞ著たりける。あの有様にても、斯様の事申す不思議さよと思し召して、抑、汝はいかなる者ぞ。と仰せければ、この尼さめ、と泣いて、暫しは御返事にも及ばず、稍あつて涙を抑へて、申すにつけて、憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申す

(一)信西の妻朝子。

者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押しあてて、忍びあへぬ様目も當てられず。法皇、げにも汝は阿波の内侍にこそあんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、唯夢とのみこそ思し召せ。とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿、殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけり。とぞ、各感じあはれける。

さて彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつ、外面の小田も水越えて、しぎたつひまも見えわかず。さて女院の御庵室に入らせおはします。障子を引きあけて、叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並びに先帝の御影を懸けられた

(二)彌陀、觀音、勢至の三尊。
(三)文殊と共に釋迦佛に侍する菩薩。
(四)支那隋代の名僧。
(五)安徳天皇。

綾羅錦繡

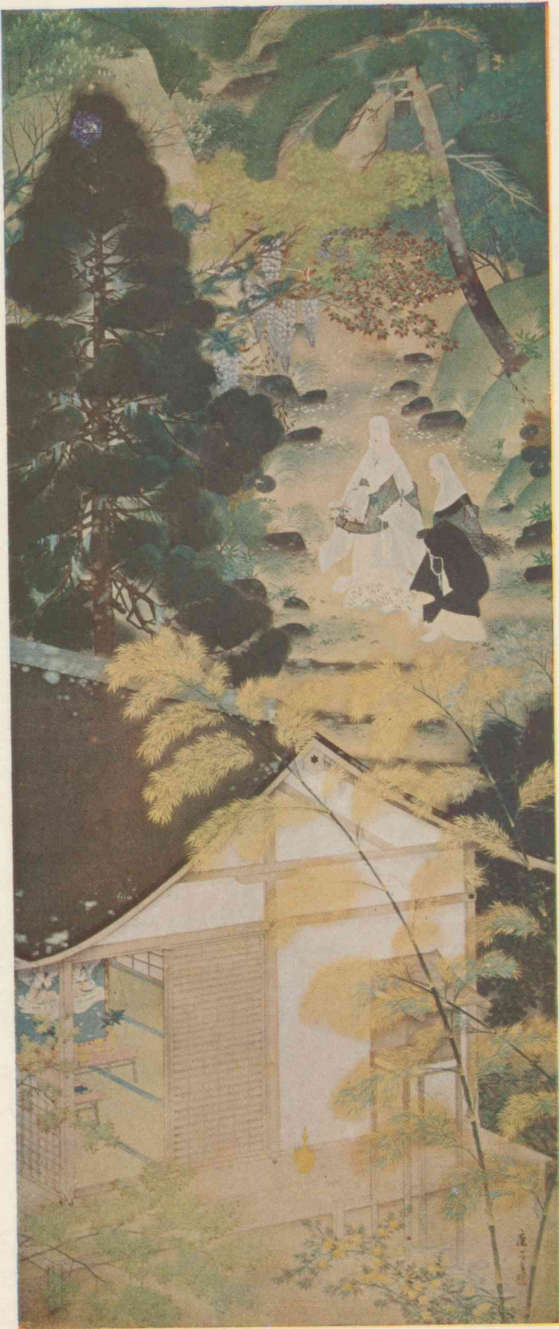
り。蘭麝の匂に引きかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を窺覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に麻の御衣、紙のふすまなど懸けられたり。さしも本朝漢土のたへなるたぐひ敷を盡し、綾羅錦繡の装も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

稍あつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぎを傳ひつゝ、おりわづらひたる様なりけり。法皇、あれはいかなる者ぞ。と仰せければ、老尼涙を抑へて、花がたみ臂にかけ、岩つゝ、じ取具して持たせ給ひて候は、女院にてわたらせ給ひ候。爪木にわらび折りそへて持たたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍局(三)と、申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も、皆袖をぞぬらされける。

花がたみ

(一)藤原維實、(ま)
た伊實に作る
伊通の子、永
曆元年(一八
三〇年)歿、年
三十五
(二)藤原盛國の子
(三)平重衡の妻

手向の花



岩田正己筆

関伽の水

攝取
十念

女院は世を厭ふ御習と言ひながら、今かゝる有様を見え参らせ
んずらん恥づかしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞな
き。宵々毎の関伽の水、掬ぶ袂も萎るゝに、曉起の袖の上、山路の露も
繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、また御
庵室へも入らせおはしませ、あきれて立たせましたる所に、
内侍の尼参りつゝ、花がたみをば賜はりけり。世を厭ふ御習、何か苦
しう候べきはやく御見参あつて、還御なし参らせ給ひ候へ」と
申されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。一念
の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆しやうじゆの來迎を
こそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見参ありけり。

— 平家物語 —

（一）小説家。名は東京正人。五十年。大正五年。市人。吾輩は猫である。十一年。草枕。暗草枕。文學評論。等々の著あり。集めて漱石全集に収められし。

七 東洋の詩興

夏目漱石^(一)

山路を登りながら考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高ずると、心安い所へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出来た。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれ程か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。茲に詩人といふ天職が出来、茲に畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。或は音楽、彫刻である。細かに

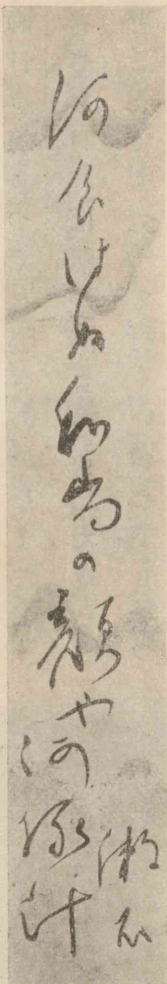
鏗鏘の音

靈臺
(Camera)
澆季溷濁の俗界

尺縑

何食はぬ和
尙の顔や河
豚汁
漱石

言へば、寫さないでも、唯まのあたりに見れば、其所に詩も生き、歌も涌く。著想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛はおのづから心眼に映る。唯おのが住む世をかく観じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足りる。この故に無聲の詩人には一句なく、



夏目漱石筆蹟

無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がしだした。谷を見おろしたが、どこで鳴

いてゐるか影も形も見えぬ。唯聲だけが明
らかに聞える。せつせとせはしく、絶間なく
鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺
されて、ゐた、まれない様な氣がする。あの
鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な
春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、また鳴き
くらさなければ氣が濟まぬと見える。その
上どこまでも登つて行く。いつまでも登つ
て行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違
ない。登りつめた擧句は、流れて雲に入つて
漂うてゐるうちに、形は消えてなくなつて、
唯聲だけが空のうちに残るのかも知れな
い。



山 路 (筆雅光野狩)

Jersey
Bryshle
Shelley,
イギリスの詩
人。(西紀一七
九二—一八二
二年)
(一)雲雀に寄する
賦。(Ode to
the Skylark.)

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人
間は借金のある事を忘れる。時には自分の
魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。唯菜
の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の
聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀
の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全體が
鳴くのだ。魂の活動が聲に現れた物のうち
で、あれ程元氣のある物はない。あゝ愉快だ。
かう思つて、かう愉快になるのが詩である。
忽ちシエリーの雲雀の詩を思ひ出して、口
の中で覺えた所だけ誦讀してみたが、覺え
てゐる所は二三句しかなかつた。
前を見ては、しりへを見ては、物ほしとあ



山 路 (筆雅光野狩)

萬斛の愁

こがる、かな、われ、腹からの笑と言へど、苦しみのそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知れ。成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひきつて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふ譯にはゆくまい。

西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂は附物かも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、唯嬉しくて、胸が躍るばかりだ。かう山の中に来て自然の景物に接すれば、見る物も聞く物も面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。

苦しみのないのは何故であらう。唯この景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面をもらつて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。唯この腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が

醇乎として醇

解脱

(一) 晉の處士陶淵明の詩、陶淵明集卷三の「飲酒二十首」中の第五。

心を樂しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのであらう。自然の力は是に於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりするのは、人の世に附物だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出る事の出來ぬのがその特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも、この境を解脱する事を知らぬ。嬉しい事に、東洋の詩歌には、其所を解脱したのがある。

(一) 採菊東籬下。悠然見南山。

唯それぎりのうちに、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て

出世間的
唐の詩人王維の詩

別乾坤

來る。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。
獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。
深林人不知。明月來相照。
唯二十字のうちに、優に別乾坤を建立してゐるのである。
——草枕——

内藤素行。松山市の人。漢詩をも善くした。大正十五年歿。年八十。

夕月や納屋も厩も煤の影

鳴雪

伊藤半次郎。實業家。安政六年信濃國(長野縣)に生れた。

八 一系の天子
元日や一系の天子富士の山

蹟筆雪鳴

氷とけて古藻に動く小海老かな
春風や役者乗せたる葛籠馬

子規
松宇

ひきあみやなきさの月に雑魚わか

子規

蹟筆規子

河東兼五郎。明治六年松山市に生れた。

門川に流れ藻絶えぬ五月哉

碧

尾崎徳太郎。小説家。東京市の人。明治三十六年歿。年三十七。

雨來らむとして頻にあかる花火哉

紅葉

釣るゝとも見えぬ小舟や行々子
炎天の小さきつむじや豆ばたけ

紅葉
井泉水

蹟筆葉紅

(一)角田眞平。政治家、實業家。靜岡縣の人。大正八年歿。年六十四。

うりちみや
組板ならす
女房ふりす
竹冷

(二)村上莊太郎。野慶應元年上野國(群馬縣)に生れた。

(三)大野豐太。醫師。熊本市の人。大正二年歿。年四十四。

(四)大谷正信。英文學者。昭和五年歿。年十九。

(五)藤谷季雄。加刺作家。京都市の人。大正六年歿。年六十四。

つはくらや
三十三間堂
の雨
酒竹

(六)松瀬彌三郎。明治二年大阪市に生れた。

夕立や金鼓山河を動かして
露涼し形あるものみな生ける

蹟筆冷竹

竹(一)
鬼城冷

樂書の扇に残る暑さかな
立秋の大鐘つくや瘦法師
一山にひびく魚板や秋ゆふべ

蹟筆竹酒

醒(三)
酒(四)
繞(五)
石竹雪

朝寒の胸ふくらせし雀かな
野分してけもなくすみぬ水や空

小(五)
青(六)
々波

落葉ふる音ひとしきり大伽藍
水色の空ひらけゆく雪の上

蹟筆影紫

紫(一)
瓊音影

北風に提げゆく網のしづくかな
乾鮭のからついてゐる柱かな

蹟筆字乙

降りやみし吹きやみし夜のさゆるなり
行く年やまことをまもる一心事

乙(三)
句(四)
佛字

(一)大須賀績。國文學者。福島縣の人。大正九年歿。年四十一。

(一) 哲學者、東北
帝國大學、山
形縣に生れた、
明治十六年、
三形大郎に記
訪歐大日記の
著がある等の

九 國民思想の獨立

阿部次郎

國民思想の不安動搖が流行の話題となつて、政黨の宣言にも、政黨首領の演説にも、學校卒業の訓辭にも、缺くべからざる題目の一つになつてから、もう相應の時が経過した。さうして今はこの問題に對する答案に、一種の型が出来かけてゐる様に見える。

それは、言ひ方に硬軟の差別はあつても、結局その原因を外來思想の惡影響に歸して、いはゆる國民思想の統一若しくは獨立を以て、この不安動搖を抑壓して行かうとするものである。しかし、國民思想の獨立とは何を意味するか。中には、彼の長を採つて我の短を補ふといふ様な、曖昧な、折衷的な、問題の要點に觸れないものもあるが、他の大部分のものは、その隠されてゐる志向を探つて、無遠慮に言つてしまへば、どうしても思想上の鎖國攘夷主義に歸著しな

墨守

ければならぬ様に思はれる。しかし、この流行の答案は果して正當であらうか。自分はこの問題を考へてみたい。

思想の獨立とは、他を排斥して自己の殻に籠る事を意味するのではなくて、自己の判斷に従つて、是を是とし非を非とする事である。自己の是とする所が他人の事であれ、外國の事であれ、また自分の非とする所が、我自身の事であれ、自國傳來の事であれ、とにかく自家獨立の判斷に従つて、是を是とし非を非とする事が出来れば、我々の思想は獨立してゐる。これに反して、それが外來の事であるが故に非とし、それが傳來の事であるが故に是とする者の如きは、たとひその思想内容が徹頭徹尾、自國かたまりであつても、その思想は獨立してゐないので、單に過去や傳統の墨守に過ぎないのである。國民思想の獨立は、それが傳統的、外來の差別はあつても、與へられたすべての材料の中から、現在及び將來の自己に必要なも

のを取分けてそれを吸収し、更にそれを材料として、現在及び將來の自己に必要なものを創造して行く、生き／＼した態度によつて始めて立證される。

國民思想獨立の條件は、單に外來思想からの獨立にあるのではない。それは自國の過去に對する判斷の獨立をも含んでゐなければならぬ。外國と過去とからの獨立とは、二つの者の排斥を意味するのではなくて、この二つの者に對する正當な評價と尊敬とを含んでゐるものでなければならぬ。外來の思想と自國の傳統との二つの者から獨立した地歩を占めつゝ、しかも新しい創造の基礎として傳統の意義を考慮し、新しい創造の材料として外來思想から學ぶべき限りを學ぶ能力がなければ、國民思想の獨立は決して全きを得ないのである。この事理は、二三の卑近な例を挙げれば、おのづから明瞭になるであらう。

照明の具は、明るく、眼によく、發火の危險が少く、點けるにも消すにも輕便な事を理想とする。この理想になるだけ接近した照明の具を求めて、我々は行燈からランプに、ランプからガス燈、電燈に移つて來た。この際、我々の選擇を指導する原理は、過去の傳統に適ふか適はないかではなくて、現在及び將來の必要に適ふか適はないかである。現在及び將來の必要に適ふものが自國の發明であれば、それ程結構な事はないが、よしそれが他國から輸入されたものであつても、暗くて不便な行燈を捨てて、明るくて便利なガス燈や電燈を用ひるのに、何の躊躇をも要しないのである。かくの如きは、家屋、衣食、什器の一切に就いても全然同様である。洋館に住み、洋服を著、洋食を口にするのが必ずしも自國文化の獨立を損ふ所以ではない。日本の風土の濕潤を顧慮しない洋風建築を建て、日本人の生活にふさはしからぬ衣食を模倣する時、我々の生活の獨立は始め

て損傷を受ける。しかし、現在及び將來の必要を無視して過去の慣習を墨守する時、我々の時代の文化は、同様にその獨立性を喪失する。

科學の方面に於ても同様の事を言得る。日本の數學の發達は、數學的眞理の認識によつてのみ可能である。隨つて我々は、それが日本の傳統に従ふと、外國の系統を受けるとを問はず、數學的眞理の認識によつて、最も有效な方法に従つてこれを研究しなければならぬ。數學史家の説く所に従へば、和算の發達は日本の科學史上極めて誇るべきものださうである。しかし、今日以後も我々が和算の方法に従つて數學を研究すべきか、洋算の方法に従つてこれをするべきかは、單にこの數學史家の所説によつて決する事は出来ない。若し算盤が計算器として世界に於ける同種のものにも優る貢獻をなし得るならば、それは我々の大なる喜であるが、和算よりも

優越した洋算のある事を知つた我々は、未練なく和算を捨てて、洋算を採用するのが當然である。將來に於ける日本數學の發達は、唯この一斷によつてのみ期待し得られるであらう。

藝術の問題は科學の場合と少しく相違する。藝術は心の表現を目的とするもので、表現される心は、作者の個性によつて相違すると等しく、各民族の藝術は、各民族の特性を有してゐる事も當然である。またたとひその民族に屬する唯一人の人であつても、彼が心底から要求する事は、この民族性の將來に於ける可能を豫告するものである。過去にその類例が絶無であるとしても、彼の創造する所は、畢竟この民族のものである。

例へば、此所に、自然の實相の出来るだけ精細な再現によつて、その感激を表現しようとする畫家が日本に現れたとする。彼が若し油繪を知らない時代に生れたならば、彼は日本繪具のあらゆる可

能性を試みる事によつて、その寫實を行ふよりし方がないであらう。しかし、油繪具が既に輸入され、油繪具で描いた繪が既に我々の眼に觸れる時代に生れた者が、この際在來の繪具を用ひるか、新しい繪具を以てするかの問題に突當るのは當然である。寫實の材料として、兩者の間にどんな得失があつても、或場合には油繪具を以てする事が一層ふさはしいものである事は、疑を容れない。その時、彼が在來の水繪具を捨てて、新しい油繪具を採るのは當然である。日本畫の傳統は、決して日本の畫家を永久に水繪具に縛り附けて置く程に狹量なものではない。

これ等すべての方面に於て、行燈萬能、和算萬能、水繪具萬能の思想は、思想上の鎖國攘夷主義である。國民思想の眞正な獨立は、日本文化の世界的獨立は、この鎖國攘夷主義に縮つてゐては出來ないのである。

或人は言ふであらう、しかし、社會思想に於ては特別の考慮を要する。我々はこの方面に於て、特に西洋思想の惡影響を遮斷しなければならぬ。と。然り、その方面に於ては、特別な考慮が必要である。しかし、それが特別の考慮を要する所以は何所にあるか。西洋思想の惡影響とは果して何であるか。

いはゆる「社會思想」が、特別な考慮を要するのは、それが單に理想のみの問題ではないからである。政治や法律や教育の問題には、理想實現の手段の問題が含まれてゐるからである。よしや終局の理想は世界人類を通じて一樣であるにしても、それを實現する手段方法の問題は、民族の歴史により特性によつて千差萬別である。この問題は、現代の日本が何事を必要とし、何事を障碍とするかに就いての、靈犀な洞察を要する問題である。今日の西洋が必要とし、または不必要とするものを、そのまま、に移して日本に通用しようとする

するのは無理である。この點に於ては、實際今日の政治、教育、その他に、日本的、特別な考慮が極めて肝要である。しかし、それは決して、社會生活の理想に就いて、西洋人の思索や憧憬と没交渉でなければならぬといふ事ではない。また理想實現の手段に就いて、西洋人の精細な研究を参考してはならぬといふ事でもない。社會生活の理想は、全人類がその所思を盡して披瀝し合はなければならず、相互に影響し合つて、他の誤謬を匡し、自己の過誤を改めなければならぬのである。さうして理想實現の方法に就いても、今日の如く世界共通の現象の多い場合に於ては、相互に参考し合ふ事を要する點が少くないのである。これ等の點に於ても、西洋との思想的交際を避けるのは、依然として鎖國攘夷の思想に煩はされてゐるものである。世界との思想的交際と相互影響とは、已むを得ない事ではなく、大いに望ましい事である。この方面に於ても、國民思想の獨立

は、世界思潮の大勢から孤立する事ではなくて、この潮流を乗切る事によつて可能である。

さうして、現在の世界に澎湃としてゐる思想上の不安動搖は、果して墮落の徵候とのみ見る事が出来るか。それは寧ろ過去の清算であり、新しい良い生活を産出する爲の必然の過程ではないのか。この不安動搖を一概に恐るべきものと見て、一日も早くこれを鎮壓しようとする者は、世界史の大勢に盲目な者であらう。不公平な社會が幾分でも公正な社會に進まうとするには、多少の不安動搖は免れない。ましてこれを西洋思想の悪影響とのみ考へて、それさへ遮斷すれば、最早この様な不安動搖がなくなると思ふのは甚だしい偏見で、社會的不公平が存續する限り、否、大きく言へば、不完全な人間の生活が存續する限り、この不安動搖は、時によつて大小强弱の差はあつても、永久に消滅してしまふ事はないのである。

然らばこの思想の動搖に處する途は如何。それは、今日の我々が過去と現在とに於ける不完全さを自覺して、これを償ふ方法を眞摯に考慮する事だけである。この問題に就いては、西洋の識者も等しく苦心してゐるのである。我々はこの問題に就いても、西洋の識者との共同研究を念としなければならぬ。この世界的な大問題の解決には、特に世界的協力が必要である。これを恐しい事の様に考へる人たちは、先づ今日の思想の不安動搖が、決して徒に憤慨すべき偶發的のものではなくて、世界史の趨勢の當然の歸決である事を認めなければならぬ。しかもこの趨勢を産出した責任は、實に我の祖先や、我々自身にある事を悟らなければならぬ。

憂ふべきは強ち外來思想の影響ではなくて、獨立した態度を以てこの大問題に對する根柢が自分自身に出來てゐない事である。若し我々に自由な伸びやかな、廣々とした心、千難萬苦をも敢へて

恐れぬ進取の氣象（一）が缺けてゐるならば、我々の思想の獨立は、いつまでたつても出來るはずはない。思想上の鎖國攘夷主義と盲目的西洋崇拜とは、畢竟選ぶ所のない偏見で、共にその思想は獨立したものでない。眞に國民思想の獨立を求める者は、先づこの偏見を併せ捨てて、さうして、自己の實力を自覺した謙遜で辛抱強い途を踏みしめて行くべきである。

一〇 國學と日本精神 その一 河野省三（二）

元祿の頃はいはゆる諸道興隆の時期であつて、儒學には木下順庵、伊藤仁齋、荻生徂徠、貝原益軒等の大家が輩出し、文壇には井原西鶴の小説、松尾芭蕉の俳諧、近松巢林子の戯曲などが何れも新生面を開き、繪畫には菱川師宣、英一蝶、尾形光琳等がそれ、時世を粧ひ、國文學にあつては、契沖が古典に新研究を試み、北村季吟が舊來

（一）倫理學者。文學博士。國學院大學教授。明治十五年。玉縣に生れた。國民道徳史論等の著がある。儒者。幕府の幹。錦里名は眞は順庵と號した。新井白石の室。鳩巢等は、その門から出た。元祿三十八年。歿。年七十八。

(一) 歌人、歌學者、
 駿河の歌人、
 來の歌論を破
 壞し、近世の
 學革新の第一
 聲を放つた。
 寶永三年(一七
 三六年)歿。
 年七十八。

(二) 國學者、
 江戸の神道高
 唱へて、聲價を
 高く、幕府に召
 されて仕へた。
 さくく、元禄七
 年(一七〇〇年)
 三十四年(一七
 五九年)歿。

(三) 國學者、
 京都の尾張國
 の人、津島神社
 官、元禄十六
 年(一七〇九年)
 歿。



契 沖 (契沖全集所載)

の諸註を集成し、戸田茂睡が新しい歌風を唱道した。それ等と相前後して、徳川光圀は彰考館を設けて大日本史、禮儀類典などの史籍を編纂し、新井白石は古史通、讀史餘論などを述作して史學の進歩を促し、また山崎闇齋、吉川惟足、眞野時繩等は神道を鼓吹して、敬神尊皇の精神を喚起した。

かういふ思想、文化共に活氣を帯びた元禄前後の社會は、一方に於て、天下の太平に馴れ、物質上の慾望に誘はれて、漸く緊張を缺く様になつたが、しかもまた他の一面にあつては、楠公崇拜の思潮も漸次に高まり、赤穂義士の快舉に忠節を尙ぶ風もまた強まつて來た。かくて質實剛健の氣風と、實際生活を重

んずる學問を獎勵した享保の政治に際會して、日本の社會はおのづから堅實な學風を要求するに至つたのである。

かくの如く元禄の時代は豊富な内容を有してをつたつたので、茲に日本の社會は、各方面に互つて精神的展開を見る事が出來た。先づ史學の進歩と尙古の趣味とから、上代文學の研究が盛んになり、それに種々な思想と要求とが加つて、古典の闡明に力を用ひる學者が多くなつて來た。次にその結果として、我が建國の精神や國體の精華が追々と明らかにになり、昔から蒙つた外來思想の惡影響に對する反感も強まり、深い國家的觀念が起る様になつた。更にそれ等の關係から、史實に立脚した敬神崇祖の思想が湧起し、また上代人の性情、即ち我が日本人の有する本來の國民性に對して、憧憬の情を深める様になつた。それから活氣に富んだ學界には、自然に忠實で自由な研究が試みられる事となつて、古語の意義も明らかにな

り、古典の精神も發揮される様になつて來た。それ等の關係から、我が上代日本人の快活で明るい心持が知られ、雄々しく大らかな氣分が認められたのであるが、一方に感情の解放を求め、他方に意志の訓練を必要としてゐた當時の武士や一般國民の間には、勢ひさういふ古典の思想と、和歌、國文の趣味とが比較的にたやすく受容れられる様になつたのである。

斯様な種々の國內の事情と人心の要求とから、茲に一部識者の間に眞實な國民的自覺が起つて來た。この自覺に基づいて、我が國體、國史、國文などの研究に向つて志を立てた最も著しい學者が、荷田春滿であつて、引續いて賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等が、それぞれ師弟關係でその學風の發展に力を盡したのである。かういふ學風が即ち國學であつて、數多い國學者の中でも、特にこの人たちが國學の四大人として尊重されてゐる。

(一)將軍吉宗の第三子。松平定信の父。天明三年(一八二二)五月十一日歿。年五十七。



荷田春滿

春滿は山城國伏見の稻荷神社の祠官羽倉氏の一族で、名はまた東鷹とも書いた。博學敦厚の人で、律令の學に精しく、江戸幕府の信任を受け、晩年、倭學校の創建を計畫したが果さなかつた。萬葉集童蒙抄、伊勢物語童子問など多くの著述がある。

眞淵は遠江國の人で、岡部氏を稱し、縣居と號した。春滿に就いて國學を修め、江戸に出て萬葉振の歌風を高調し、田安宗武の寵遇を受けた。門

下からは村田春海、橘千蔭などの人才が輩出して、古學は爲に大いに起つた。萬葉考、祝詞考、冠辭考、國意考などの新研究が少くない。宣長は縣居門下に出た出藍の才で、蓋し本邦稀に見る學者である。伊勢國松阪に生れ、鈴屋と號した。少年の頃父を喪ひ、母の苦心に

(一)後鈴屋と號した。文政八年(一八二六)歿。年六十八。
 (二)伊勢松阪の稲掛家に生れて、宣長の養子となつた。侯に仕へ、紀州退いて、子弟を教授した。享和三年(一八一二)歿。年七十九。

よつて小兒科の醫師となり、また契沖や眞淵等の著書に動かされて、我が古典の研究にも心を潛めたが、壯年の頃眞淵を松阪の旅宿に訪うて、愈、皇國學への志を固くした。宣長は博覽強記で、獨創的識見と組織的學才とに富み、古事記傳の大著を始め、玉勝間、直日靈玉



くしげ、玉の小櫛、玉鉾百首、歷朝詔詞解等の著書が多く、これ等は何れも後世の學界に裨益を與へてゐる。その子春庭の詞の八衢は文法に關する名著であつて、養子大平もまた忠實な家學の繼承者である。

鈴屋の門人は天下に普く、その主張した日本精神の覺醒は、寛政頃の國民思想に大きな反省を促したが、その後を繼いで、幕末の思想界に強い衝動を與へ、勤王の精神に深い刺戟を加へて、國學をし

(一)二四五五年。

(二)二四六一年。

造詣

て明治維新の一勢力たらしめた功勞者の一人は篤胤である。篤胤は出羽國秋田の人で、氣吹屋と號した。寛政七年の春、二十歳の時江戸に出て、苦學力行の生活を營み、享和元年即ち宣長の歿した年、その著書に啓發されて、いはゆる歿後の門人となり、常に幾多の艱難と闘ひつゝ、善く先人未踏の研究を試み、また斷えず反對者の惡罵を排撃しつゝ、終に等身の著述を公にした。その意志の鞏固と理性の透徹とは、正に彼をして立志傳中の人物たらしめたのであるが、その雄大な學風と熱烈な主張とに共鳴した多くの門人は、おのづからその精神を、幕末から維新へかけて日本の社會に活躍させたのである。篤胤の著書は古史傳、玉襟、靈能眞柱、古史徵、古道大意、俗神道大意、印度藏志、出定笑語、西籍慨論など數十部に上り、支那の古書、佛教の經典などに關しても、その深い造詣を示してゐるものが少くない。

(一) 若狹小濱藩士、宣長、考證の門人、著書に長じ、弘化三年(一八二二)に長部ある。五〇六年(一八二九)歿。
 (二) 歌人、伊勢の人、音韻の學に詳しく、立派の學問を長し、嘉永二年(一八二〇)歿。
 (三) 政治家、醫師、兵衛、諸藩を遊歴し、嘉永三年(一八二一)歿。
 (四) 勤王家、淡路の民、學問に長じ、文藝の才あり、三十二年(一八二〇)歿。
 (五) 石見國津和野の藩士、初め天柱山人と號し、通稱、國學の政、復古の意、治、抱、復、古、の、意、を、見、せ、し、め、り、八、十、年、に、歿、す、

國學界にはなほ多くの天才が輩出してゐる。國文に妙を得た上田秋成、歴史に精通した伴信友、和歌に巧な香川景樹、斬新な研究に長じた橘守部、國學を政治、經濟と結合した佐藤信淵、理性の精緻を恣にした鈴木重胤、國學に新生面を開拓した大國隆正の如き、何れ



香川景樹

も豊富な原因に興起した國學が、多方面の發展をなし得る可能性を有する事を事實に示したものである。江戸時代の學界と教育界とは儒教の天

下であつた。佛敎の信仰も、幕府の保護と長い間の習慣とによつて少からぬ勢力があつた。神道に關する學說も、元祿、享保の頃には可なり多く世に行はれた。かゝる間にあつて、國學が盛んに發達し、當代の後半期に於ける最も重要な思想、學說となつて、終に明治維新の有力な原動力となつた理由は、那邊に存

(五) 石見國津和野の藩士、初め天柱山人と號し、通稱、國學の政、復古の意、治、抱、復、古、の、意、を、見、せ、し、め、り、八、十、年、に、歿、す、

暢達

するのであらうか。

江戸時代には鎖國政策が行はれ、國民は一般に太平無事を楽しんで居つた。隨つて學問、教育はすべて保守に甘んじ、國民思想は全く多眠を貪つて居つた様に考へられてゐる。しかしながら、日本精神は決して永く安逸を好むものではない。日本民族は常に儉安姑息に満足してをるものではない。江戸時代にも理性は斷えず生きた知識を求め、感情は成るべく朗かな暢達を望み、意志は底力のある信念を欲して居つたのである。國學は自由な研究と清新な學風とによつてその理性に適應し、純樸快活な思想と平易自然な教育とによつてその感情に満足を與へ、國體觀念と敬神思想とを強調して、その意志に緊張味と靈的氣分とを加へた。かういふ人心の傾向に乗じ、時代の要求に合した所に、國學の發展を見る事が出來たので、其所に國學の特性と歴史的價值とが存するのである。

國民の知情意に満足を與へ、時代の趨勢に乗じて進展して來た國學には、種々な特色を具へた學者が出現した。かくて日本人は、國學によつても文化を消化し創造する能力を鍛練し、國體を尊重し自國を愛護する信念を樹立した結果として、明治維新を大成したと同時に、明治以後の新文明を開拓し得たのである。國學は舊時代に於ける鎖國日本の内容の充實に貢獻したばかりでなく、またよく新時代の國際日本に對しても、重要な自主的立場を据附けたのである。

一一 國學者と日本精神 その二

明治維新は我が國の政治に取つても、また國民生活に取つても、實に目ざましい變動であり、進展であつて、日本文明の發達上、最も顯著な劃期的事件であると共に、日本民族の精神的活動が、いかに

豊富な價値を有するかを雄辯に物語る事實である。

明治維新は嚴肅雄大な王政復古であると同時に、快活大膽な開國進取である。この復古的事業と進取的態度とは、固より識者の賢明と一般の妄進とも關係してをるが、その根柢には正しく日本精神の自覺が存し、或はその元氣が動いて居つたのであると見なければならぬ。實に我が日本精神の興隆が舊幕時代の日本を解放し、その活動が明治時代の國運を展開した最も大きな力である事は、何人も否定する事が出來ないのである。

近世に於ける我が國史の發展、即ち我が國民の活動を左右した最も本質的な力は、日本精神そのものであるが、この日本精神を覺醒し、培養し、そして活躍させたのには、國學者の力が與つて最も力あると言はなければならぬ。

明治三年五月五日、芝の(一)増上寺の門前にある紀州邸に於て四大

(一) 東京市芝公園
内淨土宗、徳
川氏の菩提所

(一) 伏見宮、有栖川宮、桂宮、閑院宮の四家
(二) 元三位主水正維新後外務卿となり、外務卿の特命全權公使となつたが、明治六年病没した。九十

人の靈祭が執行された。(一) 四親王家からも、各大臣からも和歌や幣物が贈られ、外務卿澤宣嘉は自ら玉串を捧げ、神祇官の主要な官員が殆ど總出で祭典に奉仕した。その盛大な靈祭は、多くの參列者をして、坐ろに明治維新に光を添へた四大人たちの學問的、精神的の功績を追慕せしめたのである。

ふみ分けよ倭にはあらぬ唐鳥の

あとをみるのみ人の道かは

これは春滿が「書」といふ題で詠んだ歌である。日本人は先づ日本の文化に親しみ、日本の精神を自覺しなければならぬ。漢籍、佛典にのみ心思を勞した當時にあつて、春滿が蹶然起つて皇國の學を復古し、古道を發揚しようとした意氣と識見とは、誠に深く歎賞しなればならないのである。

飛驒たくみほめて造れる眞木柱

(一) 二四一五年

たてし心はうごかざらまし

(一) 寶曆五年の秋眞淵はその家を新築したが、古典を愛し、民族精神を重んずる人たちの集ひ、壽いだ時に、徐に詠んで示した一首が即ちこの歌である。學問を修め、國家に奉仕しようとする者は、常にその志を堅くし、その信念を深くしなければならぬ。眞に眞淵が萬葉集の歌風を愛し、古語の註釋に努力したその理想には、高いものがあつた。その理想を繼承し發揮した者が學界の偉人宣長である。宣長の詠じた

しきしまのやまと心を人間はゞ

朝日にはほふ山ざくらばな

といふ一首は、恐らくは最もよく人口に膾炙された名歌の一つである。日本精神の昔ながらの姿としての日本心を最も善く考察し、最も深く愛重してゐた宣長は、その特色を具體化した櫻花を好ん

で居つた。その山櫻に朝日が映じた姿は、莊麗端嚴な秀峯富士山と共にまさしく日本心の表現である。宣長はその日本心を我が古典に見出し、これを以て我が國體の根柢に培ひ、我が文化の精髓を形づけるものと信じたのである。

我が日本心の第一の特色は神々しさの氣分である。即ち上品な尊い一種の神聖感である。第二の特色は懐かしさである。何となく親しみのある温かい心持である。第三の特色は清々しさ、即ちさつぱりとした恬淡な性情である。この三つの特色は、神社や國旗に於て最もよく現れてゐるが、また朝日の射した麗しい山櫻の花の趣にも、これを眺め見る事が出来る。この點から觀て、宣長のかの三十一文字は、最も簡潔に、且適切に、日本心の特徴を譬へ得た千古の絶唱であるとも言へよう。この日本心が力強く生動して日本魂となり、神州の正氣となるのである。

日本心の神々しさの念と清々しさの氣分とが結合して、其所に雄々しさ、即ち強い勇氣が出て来る。またその神々しさが懐かしさに作用する時に、みやびといふ優雅な情操が生ずる。更に清々しい氣持に懐かしさの情が結び附くと、大らかさといふ廣いゆつたりとした心持になる。かういふ種々の貴重な性情の源泉が日本心であり、その表現が日本文化の特色である。

四大人のうちで、眞淵の性格は大らかであり、宣長はみやびな性情に富み、春滿は寧ろ雄々しい氣象に近かつたが、篤胤は殊に雄々しい性格の持主であつた。かゝる各人各様の特色は主としてその個性に基づくのであるが、またその人たちの環境としての地理と時代との關係にも由るのである。とにかく日本心を發揮した四大人が、それ／＼斯様な特色を有して居つた事は、誠に興味深い現象であつて、其所にまた國學の多様性があるとも言へるのである。

滿喫する

艱難と努力とに生活苦を嘗めた篤胤は、またその活動によつて學者としての快感を滿喫した。次の一首は彼の覺悟と業績とを語るものである。

雲となり或は雨ともふりしきて

かみよの道に身をやつくさん

この決心は全くその爲せば成り爲さねば成らず成る業を成らずと棄つる人のはかなさといふ負けじ魂から來てゐるのである。篤胤は理性に富み、感情を重んじたが、何れかと言へば意志の人である。その磐石の様な意志と絶倫な精力とが、その比較考證に長じた古學と、活氣洋溢した古道とをして、幕末の學界に雄飛せしめたのである。かくて篤胤の學風は、國學をしておのづから偏狹排外の角度を鋭からしめたけれども、また時代に適應して國學を活躍させた功績は、これを多としなければならぬ。

歸嚮

國學はその勃興した原因に於て種々の事情が結合した様に、その發達した結果にあつても種々の意義が見出される。換言すれば、國學は我が近世の思想史上に於て幾多の役目を果してゐる。國體觀念を明徴にして、我が國民道德の歸嚮する所を明確にした事がその一である。人間生活に取つて最も貴い眞心を力説し、その純眞な明るい活動を以て人格の基礎とした事がその二である。我が國民性の本質を究明して、その復活に努力し、其所に日本文化の特徴を求め、國民精神の根柢を置いた事がその三である。古典の價值を闡明し、國語の淵源を探究して、我が國特殊の古典教育を開拓した事がその四である。我が上代史の事實と家庭に於ける實情とに顧て、母性の尊重を説き、女子に學問的趣味を與へた事がその五である。神代の信仰を重んじ、建國の神話に憧れたから、日本民族特有な敬神崇祖の觀念を強調し、廣く濶かい純な宗教的情操を喚起した

事がその六である。そしてこれ等の事實は、國學が我が思想史若しくは文化史に寄與した大きな功績で、國學の性質を研究する者の特に注意すべき點である。かくて國學が種々な意義を以て、明治維新に及した刺戟と效果とは、再び此所に繰返して述べる必要もあるまい。

日本民族の將來は、その國際的位置と文化的使命との關係から、益、多事であり、多難であり、しかも多望であると言はなければならぬ。この多端な未來に直面して勇往邁進するには、須らくその國民的信念を固くし、傳統的文化を理解して、先づその自主自重の精神を築くべきである。即ち日本精神は常に日本人活動の中心でなければならぬ。我が國今後のかゝる事情から熟慮して、我等は愈々日本心の特色を涵養發揮し、以て皇國の精華を輝かし、人類の幸福を進める覺悟を持つてゐる必要がある。この必要に對しても、國學

過程

とその發達の過程とは少からぬ暗示を與へてゐると思ふのである。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

新たな説を出すこと

近き世、學問の道ひらけて、おほかた萬づのとりまかなひさしく賢くなりぬるから、とりくくに新たな説を出す人多く、その説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者いまだよくもとゝのはぬほどより、われおとらじと世に異なるめづらしき説を出して、人の耳を驚かすこと今の世の習なり。その中には、ずぶんによろしきことも稀には出で來めれど、おほかたいまだしき學者の心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらん勝たんの心にて、かろくしくまへしりへをもよくも考へあはせず、思ひよ

うけばり

れるまゝにうち出づる故に、多くはいみじきひがごとのみなり。すべて新たなる説を出すはいと大事なり。幾たびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なく動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりとわれながらだに思ひならるる事の多きぞかし。

新たにいひ出づる説はとみに人の

うけひかぬこと

おほかた世のつねに異なる新しき説をおこす時には、よきあしきを言はず、先づひとわたりは世の中の學者に憎まれそしらるゝものなり。あるはおのがもとより來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味はひ考ふるまでもなく、初めよりひたぶ

うけぬ顔

るに捨ててとりあげざる者のあり。あるは心の中にはげにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに従はん事のねたくて、よしともあしとも言はで、たゞうけぬ顔して過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、そのうちのきずをあなたがちに求め出でて、すべてを言ひけたんとかまふる者もあり。

おほかた古き説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、僅かに二つ三つのとるべき所のあるをとりたてて、力の限りたすけ用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるき事を言ひたてて、八つ九つのよき事をおしけちて、力の限りはわれも用ひず人にも用ひさせじとする、こはおほかたの學者の習なり。然れども、またまれ／＼には、新たなる説のよきを聞きては、古きがあしき事をさとりて、すみやかに改め従ふ

たぐひもなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじか
かとまでは思ひよれども、自ら定むる力なくて、疑はしながらさ
あるなどは、新たなるよき説を聞きては、かくてこそはといみじく
よろこびつゝ、たちまちに従ふたぐひもありかし。

おほかた新たなる説は、いかによくとも、すみやかに用ふる人
稀なるものなれど、よきは年を経てもおのづからつひには世の人
の従ふものにて、あまねく用ひらるれば、その時に至りては、初めに
ねたみそしりしともがら、心には悔しと思へど、おくれればせに従
はんもなほねたく人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、古き
をまもりてやむともがらも多かりしか世の中のおげつらひ定ま
りて、皆人の従ふ世になりては、初めよりすみやかにあらため従ひ
つる人は、かしこく心さしく思はれ、古きにかゝづらひてとかくと
どこほれる人は、心おそく言ふかひなく思はるゝわざぞかし。

あげつらひ

師の説になづまざること

おのれいにしへぶみを解くに、師の説とたがへること多く、師の
説のわるき事あるをばわきまへ言ふことも多かるを、いとあるま
じき事と思ふ人多かんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に
教へられしは、後によき考の出で來らんには、必ずしも師の説にた
がふとてな憚りそ。となん教へられし。こはいと尊き教にて、わが師
の世にすぐれ給へる一つなり。おほかた古へを考ふること、さらに
一人二人の力もてことくくあきらめ盡すべくもあらず、またよ
き人の説ならんからに、多くの中には誤もなどかなからん。必ずわ
るきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今は古へのこ
ころことくく明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと
思ひ定めたる事も、思の外に、また人の異なるよき考も出で來るわ
ざなり。あまたの手を経るまにく、さきく、のうへを、なほよく考

へきはむるからに、つぎ／＼にくはしくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきを言はず、ひたぶるに古きを守るは、學問の道には言ふかひなきわざなり。

またおのが師などのわるきことを言ひあらはすは、いともかしこくはあれど、それも言はざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知ることなし。師の説なりとして、わるきを知りながら言はず、つゝみかくして、よざまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古へを思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古へのことの明らかならん事をむねと思ふが故に、わたくしに師を尊むことわりの缺けんことをば、えしもかへりみざることあるを、なほわろしとそしらん人は、そしりてよ。そはせんかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならんと

かにもかくにも

江戸時代の國學者、羽後の人、天明五年(一八二五)三月十四日歿。年六十八。古道大意、靈能眞柱、古史、史成文、古史、徽等の著がある。

て、道をまげ古への意をまげて、さてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや、そはいかにもあれ。

わがをしへ子にいましめおくやう

われに従ひて物まなばんともがらも、わが後にまたよき考の出で來らんには、必ずわが説にななづみそ。わがあしき故を言ひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんとなれば、かにもかくにも道を明らかにせんぞ、われを用ふるにはありける。道を思はでいたづらにわれを尊まんは、わが心にはあらざるぞかし。

——玉かつま——

一三 みくにまなび

平田篤胤

學問には色々ある。その中に何の學問がいつち大きいぞと言ふ

おもと

に、ちと自分勝手の様なれども、皇國即ち我が國の學問程大きいものはないで御座る。なぜと言ふに、先づ近く儒學と佛學との上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀む事を覚え、また左國史漢と言つて、左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書といふものなどをあらく讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに詩を作る事でも覺え、ると、もう儒者と言つて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これしきの事を覺ゆるに、さして難い事は、ありやいたさんで御座る。大方世間の儒者は、皆このくらゐなもので御座る。

さてその儒者に比べては、出家の方がよつほど廣い。なぜと言ふに、己が是非讀まねばならぬときめた俗に言ふ經文が五千餘卷、馬につけたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の一倍も

八紘九野
天漢

鈴鹿のきみ
の京にかへ
り給ふころ
りけるに馬
りはなむけ
してはなむ
百千度來ま
さむ君に春
雨のさそひ
顔なるわか
れ道やなそ
駕嵐

あるで御座る。そのみならず、儒者は佛書を讀まんでも事が缺けぬによつて、とんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人もない。僧徒はそれと事かはり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。また詩も漢文も儒者と同じ様に作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いで御座る。

さて皇國の學問がいつち廣いと言ふ故は、右申す通り、儒學、佛學を始め、種々様々の學問があつて、その道のこゝろと事とが、盡く皇國の學び事に混雜して、譬へば、彼の八紘九野の水、天漢の流、これに注がずといふ事なしといふ如くで御座る。その通り入混つてある

百千度來ま
さむ君に春
雨のさそひ
顔なるわか
れ道やなそ
駕嵐

平田篤胤筆蹟

(一) 宋の蘇軾の弟轍(西紀一〇一一年七月二十四日歿)

故に、人の心もそれに従つて移り、何れを是とも、何れを非とも分ちかねて、言はぶまごついてゐる事が多くある。それ故に、その混雜をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、その混雜をより分けて、眞の道の害となる事をいひ顯さうとするに就いては、よく先方の事をも知らねばならず、かの唐人蘇子由といふ者の、善與人言者、因其人之言而爲之、言則天下之辯者服矣、云々と申したる如く、此方の事ばかり言つたのではいかず、例へば、僧徒を諭すには佛書で言ふと、ぎうの音も出ず、儒者を諭すには儒書で論ずれば、猫に追はれた鼠の様に畏まる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬ事で御座る。殊にもろくの學問の道、たとひ外國の事にしろ、皇國人が學ぶからは、そのよき事を選んで、皇國の用にせうとの事で御座る。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をも、すべて皇國まなびと言つても違はぬ程

の事で、即ちこれが皇國人にして外國の事を學ぶ者の心得で御座る。
——古道大意——

自修文

逆境の恩寵

加藤 玄智

新聞を賣りながら苦學する。牛乳を配達しながら學校に通ふ。いかにもつらい。朝も早く起きなければならぬ。夜も寝るのが遅くなる。その前後僅少な時間を割いて學問を勉強しなければならぬ。どうも苦しい。これが華族の若様に生れたなら、富豪の子弟であつたならばと、時々愚痴も出る。女學生にしてもさうである。家が零落して父は既に逝き、母は病身、女中も使はず、臺所の水仕事は言ふに及ばず、幼い弟妹の世話までして學校に出なければならぬ。これが華族のお姫様であつたらばと、時に我と我が身を顧て、不幸の身をかこつ涙も出よう。さあこゝだ。考へ直さなければならぬ所はこゝだ。さういふ逆境が、却つて本當の人物を作

(一) 哲學者、文學士、陸軍大學教授、東京帝國大學、東京市治學士、助教授、東京市治學士、六年、東京市治學士、國體、神道、我が國、東西思想の比較研究がある

うぶな者
世の惡風に染
まなげ者

沈淪する
落ちぶれる。

り上げてくれるものである。いはゆる「艱難汝を玉にす」で、順境にあつてほしい放題の出来る者は、遂に身を謬り易い。朝寝坊をする。毎日學校も遅刻をする。金も多少は自由になる所から金づかひも荒くなる。やれ活動寫真だ、やれ芝居だと勝手に遊び歩く。世間にはさういふうぶな者を引つけかけようとして、綱を張つて待つてをる惡魔が澤山ある。遂に墮落に墮落を重ねて、救ひ難い人生の深淵に沈淪し、有爲の一生を棒に振つてしまふ者が少くない。かういふのは、その人個人の不幸と言ふばかりでなく、國家の立場からも大きな損失である。勿論、順境にある者が皆々さうといふ譯ではないが、動もすれば、さういふ魔の誘惑に罹り易い。これに反して逆境にある者は、生活に餘裕が少い。腕一本、脛一本でし上げなければ、獨り自分の一身が立ちゆかないばかりでなく、父母兄弟をも窮境に陥れる虞がある。どうしてもそんな優長な事をしてはをられない。自分だけでもどしどし、勉強して、早くし

盤根錯節云々

「不遇」盤根

錯節、何以別

利器乎、(後

漢書)

古人

支那南北朝時

代の宋人范曄

後漢書の撰者

儋石の儲

は、

蘊奥

學問技藝等の

蘊奥

一段高く抜き

出たさま、

頭角を見ず

才學が群にす

ぐれあらはれ

出るに言ふ



平田篤胤

上げてしまはなければならぬ。かういふ氣分だから、逆境にある人は、學生にしても眞面目である。氣分に眞劍味を帯びてをる。石に噛りついても成功しなければならぬといふ生存上の必要が、ひし／＼と身に迫つて來てをる。この眞面目、この眞劍味、これが實に人を成功に導く偉大な原動力である。盤根錯節に遇はずんば何を以て利器を別たんや」と言つた古人の言、實に我を欺かぬのである。我が國學の大家平田篤胤翁が、家に儋石の儲もなく、僅かに醫を業として生計を支持し、傍ら國學の蘊奥を究め、以て嶄然斯界に頭角を見したのも、一にその逆境の賜である。翁は古道の闡明にこれ日も足らずして、僅かな時間でも惜しんで勉強された爲、花鳥風月の目を喜ばし耳を樂しましめる物をも、十分賞玩する餘裕がなか

つた。これ翁に花鳥風月を詠じた歌の見るべき物が少い所以であらう。或時翁はこの感懐を述べて

月花をわれもあはれと見てはあれど

あはれと歌ふひまなかりけり

と言つてをる。以て翁が貧賤の中から勉學にいそしまれ、以てその大器を晩成された苦心が想見されるのである。山崎闇齋が曾て會津侯保科正之に答へて、自分には人の得知らぬ三つの樂しみのある事を告げ、第一は禽獸に生れずして人間と生れた事、第二は幸に亂世兵馬の間に生れずして生を泰平の御世に享け、靜かに古書を繙いて古聖前賢とその心交を縦にする事を得る事、第三は王侯の家に生れて婦人の手に成長し、無意義な一生を過す事なく、幸ひにも貧困に生れて拮据勉勵、辛苦を嘗めて學問をし、先王の道を學ぶ事を得た事、この三樂中、最後の樂こそ實に貧賤に長じた者の天與の特權であると喝破し、以て會津侯を

勉學 大器を晩成する
秀忠の第四子、會津松平家の祖、寛文三十二年(一七二二)歿、年六十

拮据 身體を勞し働くこと
先王の道、昔の聖王のなへた道

諷諫 遠まはしにいさめる、それとなくいさめる

這般

天公配劑の妙 天帝(造化の神)の配りあはせのたくみなこと
作者不詳、塞翁の馬と云ふある

新約聖書、ローマ書第五章

諷諫したと言ふのも、また這般の消息をよく傳へてをる。獅子は己の生んだばかりの子を、先づ千尋の谷底に蹴落して、艱難に處する訓諫を獅子に與へるとの事である。かくして百獸の王となる資格も自然養はれるのである。順境の生む悲喜劇、逆境の與へる天惠、達觀し來れば、眞に天公配劑の妙に驚かざるを得ない。

世のなかは何につけても塞翁のうまくは行かぬものとこそ知れ

しかもこのうまく行かぬ所に妙味があり、大宇宙の深い教訓が含まれて居り、未來の偉人を生出す眞の訓諫が存してをる。使徒パウロは、この點に關する自己の體驗を左の如く述べてをる。眞に味はふべきである。

艱難にも喜をなせり。蓋し艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は恥を來らせざるを知る。

支那の賢哲孟子はまた左の如く説いてをる、

(一)孟子告子章句下

拂亂す 逆らひ亂す。

曾益す だんくふや

(二)作者不詳。

(一) 天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ず先づその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を餓し、その身を空乏にし、行^{おこなひ}そのなす所に拂亂^{おとろし}す。心を動かし性を忍んで、その能くせざる所を曾益する所以なり。

と。古歌に曰く、

うき事のなほこの上につもれかし

かぎりある身のちからためさん

一四 御堂關白

(三) 花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかき亂れ雨のふる夜、帝さうくしくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましてけるに、人々御物語申しなどし給ひて、昔恐しかりける事どもなどに申しなり給へるに、今

(三)第六十五代花山天皇後、天皇は讓位後、花山院に入御あらせられた。つうくし

むづかしげ けしき覺ゆ

(一)藤原道長

さる所おはします

(二)藤原道隆、道の長兄

(三)藤原道兼、道の仲兄

びんなき事

ながむく

宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、けしき覺ゆ。ましてもの離れたる所などいかならん。さあらん所に一人いなんや」と仰せられけるに、「えまからじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりともまかりなん」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、いと興ある事なり。さらば行け。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ行け」と仰せられければ、よその君たちは、びんなき事をも奏してけるかなと思ふ。また承らせ給へる殿ばらは御氣色變りて、益なしと思したるに、入道殿はつゆさる御氣色もなく、私の從者をば具し候はじ。この陣の吉生まれ、瀧口まれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入り侍らん」と申し給へば、あかしなき事」と仰せらるるに、「げに」とて、御手箱におかせ給へる刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむく、各おはしましぬ。

子四つ

(一)道隆。

おちなし
(二)道兼。

子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけん、道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ。と、それをさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴の松原の程に、その物ともなき聲どもの聞ゆるに、ずちなくて歸り給ふ。粟田殿は露臺の外まで、わななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東おもてのみぎりの程に、簷とひとしき人のある様に見え給ひければ、物も覺えで、身の候は、こそ仰言も承らめ。とて、各立歸り参り給へれば、御扇をたゞきて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思し召す程に、ぞいとさりげなく事にもあらずげにて、参らせ給へる。いかに、い」と問はせ給へば、いとどかに、御刀にけづられたる物を取具して奉らせ給ふに、こは何ぞ。と仰せらるれば、たゞにて歸り参りて侍らんは、あかし候まじきによりて、高御座の南おもての柱のもとを削りて

候なり。とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色はいかにもなほ直らで、この殿のかくて参り給へるを、帝より始め感じの、しられ給へど、羨ましきにや、またいかなるにか、物も言はでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて藏人して、けづりくづを遣して見よ。と仰言ありければ、もて行きて、おし附けて見たうびけるに、つゆたがはざりけり。そのけづりあとは、いとけざやかに侍るめり。末の世にも見る人は、なほあさましき事にぞ申し、かし。

—大鏡—

一五 自覺の徹底

(一) 吉田 靜 致

我等は眞の現代と皮相の現代とを區別しなければならぬ。精神生活の必須の要求に基づいて出で來つた新運動は、眞の現代の特色をなしてゐるものである。ところが、かゝる要求からでなく、唯變

(一) 倫理學者、東京帝國大學名譽教授、長野縣に生れた。

化を好むといふ様な極めて淺薄な理由によつて起る新運動がある。人間は變化を好む者である。しかし、その變化に對する淺薄な要求から生じた新運動の如きは、決して現代を作らない。眞の現代を作るものは、我々の心の奥底にある精神生活の要求から生じた新運動でなければならぬ。しかして、かゝる新運動、即ち眞の現代の爲にするものは、偽の現代の皮相的のものから明確に區別されねばならぬ。眞の現代は、偽の現代に勇敢に反對してこれをうち滅さなければ、決して發展させる事は出来ない。即ち眞の現代を實現せんと欲するならば、偽の現代を征服する事によつて、始めてその目的を達し得るものである事を覺悟しなければならぬ。その物質的にのみ趨る傾向を打破して、精神生活といふものに注意を向け、眞の現代を造り出さなければならぬ。これ即ち自覺の徹底を叫ぶ所以である。いかなる場合にあつても、我々は精神生活を基とし、本當の

我を發揮しなければならぬ。かくて、一たびその本當の我といふ事に想ひ到れば、茲に人間の尊嚴な事を認めざるを得ない。人格の偉大な事を認めざるを得ない。

私は今日の日本の思想界の状態に就いて、三つの大きな缺陷を認めるのである。第一は、人間の尊嚴といふ事を餘り考へてをらぬ事である。第二は、自發的態度に乏しい事である。唯、外からかうするものだと言はれて、その眞意義の何たるを知らず、盲目的に動いてゐるのは宜しくない。須らく自ら進んで、自發的態度に立たなければならぬ。一方に於ては、人間の尊嚴といふ感じが少く、さうして、それに關聯して自發の念が乏しいのである。第三には、敬虔の念に缺ける所がある事である。事を行ふに當つては、唯利害にのみ拘つて實行してはならぬ。我の中に看出される第一我から現れて來る最高の意味に於ける良心の命令を衷心より重んじて、これを實行す

肉體的衝動の
奴隸

るといふ態度に立たなければならぬ。しかも、とにかく利害によつてのみ事を行ふ者が多いが、これは皆敬虔の念に乏しい結果である。

人間の尊嚴とか、自發の態度とか、或は敬虔の念とかいふ事は、私の考へる所では、徹底せる自覺から當然生じて來ることである。第一我を自覺するに至らんか、私の極めて尊嚴な所以を知る事が出來る。決して我を物慾の奴隸とする事は出來ない。肉體的衝動の奴隸とする事は出來ない。その他、種々の關係に於て、人間の尊嚴といふものが現れて來れば、道德上偉大な力となるのである。さうして、第一私の衷心の要求に基づいて種々の事を實行し、他よりあてはめられた規則によつて、嫌々ながら動くといふ様な事ではなく、我自ら進んで善を實行するといふ自發の態度は、實にそれから生じて來る。

同じく國民道德を實行するに當つても、これは當然國民として進んで實行すべきものであるといふ様に、自發の態度に立つてこれを行ふのでなければ、生命ある道德といふ事は出來ない。外部よりの規則によつて行つたといふだけでは、いかにその事が美しい形であつても、眞の生命ある道德はそれより生じない。やはり、第一我たる私の本質そのものの要求よりして、自らこれを求めて來るといふ自發の態度に立つて、始めて眞の道德が成立つのである。これによつて、敬虔の念といふものも自然に生じて來るのである。唯外の形式に囚はれて動くのではない。第一我たる精神の命ずる所、國家社會と一體たる眞私の命ずる所に對する敬虔の念が、根柢となつてゐるのでなければ、到底眞の道德となる事は出來ないのである。さういふ事は、皆徹底せる自覺よりして生ずるのである。

——道德の根本義——

(一)評論家、思想家、文學博士、樗牛と號した。山形縣の人。明治三十五年、歿、年三十二。況後録、わが袖の記、瀧口入道等の著があり、すべて樗牛全集に收められてゐる。

一代の宗師、百世の儀表、(二)伽比羅衛とも書く。

成道

正覺、巡錫す、(三)ガンジス河の支流。

一六 世界の四聖

高山林次郎

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、キリストの四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名は悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、その妻子を棄てて王城を遁れ、山林に隠れて道を修むる事六年、終に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の畔に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當

元々、歸命の大道

木鐸



釋迦 (鈴木大木年筆)

の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてそ

の歸依する所を知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯

風采を想望す

門下の高足

蕩然として地を拂ふ

教化の陵夷

狂瀾を既倒に廻らす

國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五



十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐる者あり、子にしてその親を害する者あり、強は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や

る者あり、子にしてその親を害する者あり、強は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や

老脚蹉跎

(一) 衛の人。孔門十哲の一。

下學して而上達す

(1) Socrates (西紀前四七〇—三九九年) (2) Athens 古代ギリシヤの都府。

詭辯學派

高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方に漂浪すること三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。是に於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知る者なきか。と。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知る者なからんや。孔子答へて曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して而上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。と。後幾許もなくして歿す。時に年七十三。

(2) ソクラテスはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。ギリシヤの當時はいはゆる詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道德は空文の

諄々として倦
まず

侃諤の正義

喬木は風に折
らる

讒訴す

不遜

上にのみ貴ばれたり。その状なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄諄として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず。侃諤の正義、その稀代の雄辯と相俟ちて一世を風靡せり。

然るに「喬木は風に折らる」といふ喩にもれず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふる所、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテスを以て傲慢不遜なりとな

何爲るものぞ

Asclepius
ギリシヤの醫
藥の神。アポ
ロの子。
謝を致す

し、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むる者に對しては、乃ち答へて曰く、「余は唯正義に導かれんのみ。死また何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一雞を以てアスクレピオスの神に捧げよ」と。蓋し、曾て病みし時平癒を祈りて、謝を致す事を忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。



ソクラテス

(1) Judea.
(猶太)
(2) Bethlehlem.
イギリスの委任統治國パレスチナの首都イエルサレムの南約八キロメートル
(3) Joseph.
(4) Johannes.

寧日なし
收斂
放縱の俗



キリスト

キリストは本名をヤソと言ふ。キリストとは「膏灌がれたるもの」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生る。その生後四年を以て西曆紀元第一年と成す。父はヨセフと呼べり。賤しき木匠にして、母をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間ユダヤの各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。抑、當時はローマ帝國の榮華正にその極に達し、禍亂の萌芽内に胚胎し、災異頻りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國たるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇なる淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。是に於て一世の人心は、悉く偉人の現出し

救世の使命

晏然



高次郎

て、この暗黒なる社會を照破せん事を渴望せり。キリストこの間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等はこれを喜ばず、以て猥りに新法異説を唱へて民を迷はす者なりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を赦せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧て曰く、「イエルサレムの女子よ、吾が爲に哭く事勿れ。唯己と己の子との爲に哭け」と。かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て、十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教即

軼軻不遇

ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖のうち釋迦を除きては、何れも軼軻不遇の裡にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテスとキリストとは何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。悲惨なりと謂ふべし。然れどもこれ等の人の志す所は天下後世にあり、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然としてなほ歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて、吾が道行はずんば、吾何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲にその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずる者に取りて、死はた

何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷を覺さざるべからず」と。キリストは己を罪に陥るゝ者の爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なる。

— 橋牛全集 —

一七 東下り

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあらず、東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。路知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋と言ふことは、水のくも手に流れ分れて、木八つ渡せるによりてなん八橋とは言ひける。その澤のほとりの木蔭におりゐて餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見てある人のいはく、かきつばたといふ五文字

を句の上にするて、旅の心を詠め」と言ひければ詠める、
唐衣きつ、馴れにしつましあれば
はるく、來ぬる旅をしぞ思ふ
と詠めりければ、皆人餉の上に涙落してほとびにけり。



八 橋 (尾形光琳筆)

の心細く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり、かゝる路にはいかでかおはする。と言ふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にとて、文書きてつく。

(一)安倍郡と志太郡との境

駿河なるうつつの山邊のうつつにも

ゆめにも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつもごりに、雪いと白う降りり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらん

その山はこゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらん程して、なりは鹽尻の様になんありける。なほ行きく、て、武藏國と下總國とのなかに、いと大きな河あり、それを角田河と言ふ。その河のほとりに群れあて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れなん。と言ふに、乗りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかき、しぎの大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守

鹽尻

に問ひければ、「これなん都鳥」と言ふを聞きて、
名にしおはゞいざこと問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと
と詠みければ、舟こぞりて泣きにけり。
—伊勢物語—

一八 石彫獅子の賦

薄田泣菫

詩人。名は淳
介。明治十年
岡山縣に生れ
た。著書集、ゆ
く春等の外、
隨筆茶話、ゆ
木蟲魚話、大
讀頌等の著が
ある。

童子うなこに問へば石工いしざりは、木かげに夢を結びぬと。
入りて小暗き仕事場に、刻みさしつる唐獅子の
圓うまじき頸をかきなでて、誰ぞもの思ふは、ひそやかに。
朽木の棚にすゑられて、顔くすぼるゝあら彫の
豕たのこいぬ狗兒野の狐こ、さてはを鹿のむらがり、

こはめざましき誇かな、日かげにぬるゝ獅子の影。
裂けたる岩に爪かけて、雄々し、いかるかその姿、
たてがみ長く背にまきて、見れば涌きよる春の潮。
胸はゆたかに力男ちからをとこが、ひきしぼりたる弓のごと。
忿怒現ずる明王の、ひろき肩より燃えあがる
焰ほかながき尾は躍り、にこ毛密なるあなうらは、
いざよひ薔薇の花ふむも、巢くへる鳥は目ざめまじ。
心がまへのいみじさや、瞳子ひとこ彫られぬ唐獅子は、
光を知らぬ盲目めくらめくらの身、鼻かぐはしき香を嗅ぐも、
いまだ前脚ふみあげて、花野の路はしだかじな。

鑿の手またく捨てられて、御苑みやぞんの夏のあけぼのや、
 緑したゝる木のかげに、巨人の如く立たんとき、
 雄姿ゆうざいかに、背に伏して、しばし想像おぼひにふけらまし。

二

汝の王者かたどられ 眞白ましろき石いしに刻うまれぬ。
 野より、山より、林より、つどへよ獸けもの列りなりて
 蹄ひづりの前にひざまづき、弱よわきを恥はづぢて僕しもべたれ。

おほき靈魂たましひくんだり來て、眞白ましろき石いしに包たまれぬ。
 野より、山より、林より、つどへよ獸けもの列りなりて
 その光輝かがやきにぬれぬべく、蹄ひづりの前にひれふせよ。

無上の權威けんいあらはれて、眞白ましろき石いしに具たせられぬ。
 野より、山より、林より、つどへよ獸けもの列りなりて
 王みことにさゝぐる燔祭ほにまつりの 聖ひがひき火蓋かざを整ととのへよ。

斑まだらの牛うしとかもしかは、ふかき痛手いたでに甘あまんじて、
 焰えんのうちうちに身みを投なげよ、誇うるべきかな、犠牲けいせいの
 高たかきはまれは汝なんぢにあり、羨うらやむ群ぐんぞおろかなる。

見みよ犠牲けいせいはそなはりぬ、獅子ししは額かぶたにたてがみの
 ながき流ながをふるはせて、あな起たちあがる、戦鬪たたかひと
 勝かちと力ちからの權化けんかなり、伏ふせよ。と呼よべば皆みな伏ふしぬ。

○ さかんなるかな、その言葉、神は死ぬめりとこととはに、

人は魔のごと強からず、
値の源ぞ、わづらひと
われは王者ぞ、萬有の
もだえの胸のあるじなり。

あゝ、運命の眩ほきをも、
胸わなゝかぬ雄心の
眼ひらきてながめ入り、

勝利のおもひに漲れる、
この身この世に何の死ぞ。
若き勇氣に溢れたる、

絶ゆることなき永遠よ、
われは汝の伴なり。と、
時に黙止もだはやぶられて、

たかき讚美と服従したがいは、
雷のどよみに現れぬ。

いま想像の羽たゆむ。
見れば唐獅子日を浴びて、
ふくよかにまた靜かなる
すがたいかなる誇ぞや。

石彫ながく傳はりて、
あゝ、藝術は支配せよ、
榮はとならんは幾千歳。
とはの生命ぞ汝にある。

—泣菫詩集—

一九 月草の花

(一)藤原道平。

こたみ

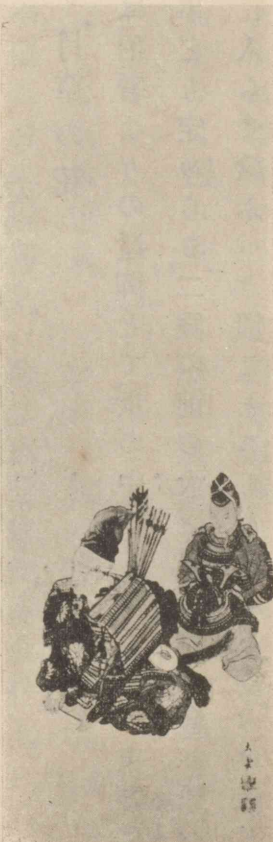
氏長者

さて都には、伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。先づ東寺に入
らせ給ひて、事も定めらる。二條の前の大臣召ありて、参り給へり。
こたみ内裏に入らせ給ふべき儀、ことさらめきてあるべけれども、
璽しの箱を御身にそへられたれば、唯遠き行幸の還御の儀式にてあ
るべき由定めらる。關白を置かるまじければ、二條の大臣、氏長者を
宣下せられて、都の事管領あるべき由承る。天の下唯この御計らひ
なるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。

(一)元弘三年、(二)九九三年

むくつけき様

(一) 六月六日、東寺より常の行幸の様にて内裏にぞ入らせ給ひける。めでたしとも言葉なし。ごぞの春いみじかりしはやと思ひ出づるも、たとしへなし。今も御供の武士ども、ありしよりはなほ幾重ともなくうち圍み奉れるは、いとむくつけき様なれど、こたみはうとましくも見えず、たのもしくて、めでたき御守かなと覺ゆるも、



うちつけめなるべし。世の習時につけて移る心なれば、皆さぞあるらし。先陣は二條富小路の内裏に著かせ給ひぬれど、後陣はなほ東寺の門まで續き控へたりきとぞ聞えしは、誠にやありけん。正成もつかうまつれり。かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衛府

(筆雲大村小) 公楠大

うちつけめ

(二)名和長年

ゆすりみつ

の者どもにうち交りたり。珍しく様かはりて、ゆすりみちたる世の氣色かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りたりけるにかと、めでたきにつけても、なほ前の世のみぞゆかしき。車など立ち續きたる様、ありし御下りには、こよなく優れり。物見ける人の中に、昔だにしづむうらみをおきの海に

なみたちかへる今ぞかしこき

(一)漢の高祖が秦宮に入つた時を指す。
(二)藤原禮子。

昔の事など思ひあはするにやありけん。金剛山なりし東の武士ども、さながら頭を垂れて参りきほふ様、漢の始もかくやと見えたり。禮成門院もまた中宮と聞ゆ。六日の夜やがて内裏に入らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほ怠らねば、いつしか五壇の御修法始めらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々残りなく参り集ふ。十三日大塔の宮都に入り給ふ。この月頃に御ぐしおほして、えも言はず清らかなる男になり給へり。唐の赤地の錦の御鎧直垂とい

ふ物奉りて、御馬にてわたり給へば、御供にゆゑしげなる武士どもうち圍みて、御門の行幸なりしにも、ほとく劣るまじかめり。速に將軍の宣旨を蒙り給ひぬ。流されし人々程なくきほひのぼる様、枯



大塔宮(服部有恒筆)

れにし木草の春に逢へる心地す。その中に季房の宰相入道のみぞ、あづかりなりける者の情なき心ばへやありけん。東のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸りのぼれるにつけても、父の大納言、母の尼上など

塵を出づ
眉を開く

(一)江戸時代の文豪、本名は杉森信盛、葉林子と號した。享保九年(一七三四年)二月三十一日歿。
(二)明末の人鄭芝龍、(永曆一五年、西紀一六六二年)歿。
(三)その子鄭成功、(康熙元年、西紀一六六二年)歿。

より塵を出づるにはあらず、かたきの爲に身を隠さんとて、かりそめに剃りしばかりなれば、今はた更に眉を開く時になりて男になれらん、何の憚かあらんとぞ、同じ心なるどち言ひあはせける。天台座主にていまし、法親王だにかくおはしませば、まいてとぞ、誰にかありけん、その頃聞きし、

すみ染の色をかへつ月草の

うつればかはる花のころもに

— 増鏡 —

二〇 千里が竹

(一) 近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土ちゆうとの地にも著きにけり。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦、装束引きかへ妻子に向ひ、我

(一)明朝の將軍。後、韃靼に内應し、明帝を弑した。
(二)明朝の忠臣。司馬大將軍。西紀一六七八年歿。
(三)明の熹宗の時。代。西紀一六二五年。
(四)錦祥女。甘輝の妻。

(四)明の將軍。初め、韃靼に降り、後、鄭芝龍に應じた。

(六)鄭成功。國姓爺と言ふ。

が本國と言ひながら、時移り代變り、天下悉く李踏天が引入れにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねん様もなく、司馬將軍吳三桂が、生死の様子も知れざれば、何を以て義兵の旗を揚げ、いづくを一城に立籠るべき所もなし。然るに某去る天啓五年、この國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を、乳母の袖にすて置きしが、その子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は、八重の沙路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便りに聞及ぶ。頼む方はこればかり、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、婿の甘輝もやすくと頼まるべし。これより路の程百八十里、うち連れては人も怪しまん。我一人路をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、追ひつくべし。これより先は音に聞ゆる千里

(一)支那湖北省嘉魚縣。
(二)蘇東坡。

たづきも知らぬ

ほうど我をぬかす

が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江、これ猩々の栖む所。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待ちそるへ、萬事をしめし合すべし。と、方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、飛越え跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうど我をぬかし、なう母ぢや人。この脛骨に覺えあり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程藪の中うむ、分つたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴と、根笹、大竹押分け踏分け、なほ奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、

讀めたり

(一) 虎嘯而谷風至。龍舉而景雲屬。(淮南子)
(二) 晉の人。十四歳の時赤手で虎を搏つて父の難を救つた。

いがみ懸る

らつは、ちやるめら高音をそらし、ひよう／＼とこそ聞えけれ。すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、または狐のなす業か」と、茫然たるそのをりふし、空凄じく風起り、砂を穿ちどう／＼、竹葉さつと巻立て／＼、吹折る竹は劍の如く、凄じなんども愚かなり。和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、／＼、さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子の者。此所は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の揚香は、孝行の徳に因つて、自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力益、日本力、刃で向ふは大人氣なし。虎は愚か、象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひとつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。案にたがはず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎたて、二人を目がけいがみ懸るを

ふいがう(轡)

事ともせず、弓手に撲り馬手に受け、もぢつて懸くれば身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえい／＼／＼。虎の怒毛、怒聲、山も崩る、／＼如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息疲れ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、ふいがう吹くが如くなり。母藪蔭より走り出で、やあ／＼和藤内、神國に生れて、神より受けし身體、髮膚、畜類に出で合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離るるとも、神は我が身にいます。川、大神宮の御祓、納受などかなからんや」と、肌の護符を渡さるれば、げに尤も」と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じり／＼と四足を縮め、恐れわなき岩洞に匿れ入る、尾筒をつかんで跳返し、打伏せ／＼、ひるむ所を乗懸り、足下にしつかと踏まへしは、天の斑駒、素戔鳴尊の神力、天照神の威徳ぞ有難き。

風來人

笑壺に入る
ほざく

いかな事

かゝる所に勢子の者、群がり来るその中に、大將と思しき者大音揚げ、やあ、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李踏天より、韃靼王へ献上の爲、狩出したる虎なるぞ。早々渡せ、異議に及ば、ぶち殺さん。しやぐわん、とわめきけり。李踏天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、やあ、餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さ程ほしがる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら、石花菜とやら、此所へ突出し、詫言させいぢきに逢うて用もある。さもないうちはいかな事ならぬ。とねめつくる。やあ、ものな言はせそ、討取れ。と、一度に劍をはらりと抜く。心得たり。と守を虎の首にかけ、母の側にひつ据うれば、繋ぎし如くに働かず。お、心安し。と太刀差しかざし、群がる中に割つて入り、八方無盡に割立て、撫でまくる。
勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、おのれ老耄餘さじ。と、一文

色めき立つ

二王立

せがれ(悴)
肥前國(長崎縣)北松浦郡平戸島にある。

字に切掛る。なほも神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴し、猛りうなりて飛懸る。こはかなはじ。と安大人、勢子の者がさいたる劍、かり鈍、數槍、手に當るを幸ひに、投附け投附け打懸くる。虎は神力自在を得、劍を宙にひつくはへひつくはへ、岩に打當て微塵になす。刃の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば、官人ども、色めき立つて迷惑ふ。後より和藤内、どつこい遣らぬ。と顯れ出で、安大人が素首をつかんで差上げ、くるくと振廻し、えいやつと打附くれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。この勢に官人ばら、後へ戻れば、悪虎の口、先へ行けば和藤内、二王立に突立つたり。あ、申し御堪忍、御免、々々。と手を合せ、土にくひつき泣きゐたり。和藤内、虎の背を撫でて、うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並を覺えたか。我こそ音に聞えた。鄭芝龍老一官がせがれ、九州平戸に成長せし和藤内とは、我が事

なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷に立歸り、國の亂れを治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ。否と言へば虎の餌食。否か、應か」とつめかくる。なう、なんの否で御座りましよ。韃鞨王に従ふも李踏天に従ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る」と、地に鼻つけて畏まる。

出かした

「お、出かした、く。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん」と、指添のちひさがたなはづし、これも當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く間に剃りじまひ、二櫛半のはらけ髪、頭は日本、ひげは韃鞨、身は唐人、互に顔を見合せて、頭ひやつく風引いて、くつさめ、く、むら雨」と、涙を流すぞ道理なる。親子どつとうち笑ひ、そろひもそろうた供廻り、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎まで、面

はらけ髪



國姓爺正本挿畫

面が國どころ頭字に名のり、二行に立つてぼつたてる「承り候」と、御先手の手振の衆、ちやぐちう左衛門、東蒲塞右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、じやが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參の御供先、あとに引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る、口取る、國を取る、譽は異國本朝に、踏跨げたる鞍あぶみ、虎の背中のうち乗つて、威勢を千里に顯

—國姓爺合戦—

自修文

教化上より見た近松

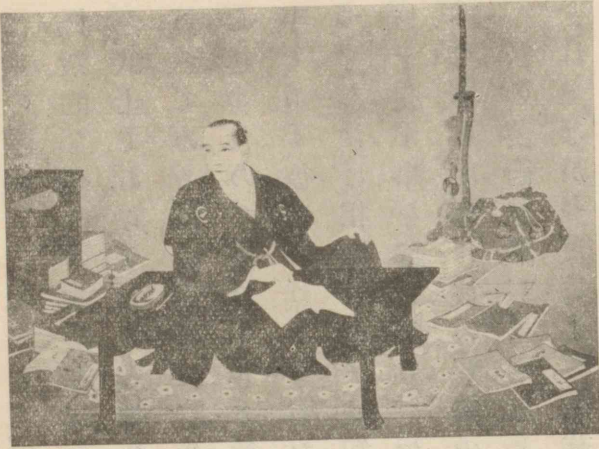
藤村 作

教化の目から見れば、巢林子の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たるものである。元祿時代は主従の上下關係と、軍人たる職責の性質とを基礎として成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが階級的に獨立して、未だその相互の浸潤感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。その後兩階級の間、兩精神の浸潤感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として、政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化は、それが階級制を壊す様な事でない限り、多く問はれなかつたのみならず、實際町人の徳操品位を高めたものは、その感化であつたのである。この武士精神を町人間に宣傳して、町人

國文學者、東京帝國大學教授、明治八年福岡縣に生れた。上方文學と江戸文學の國文學史序説等著がある。時代淨瑠璃、歴史上の英雄偉人等を題材に取つた淨瑠璃に對する職責、職務上の責任

識者見識をもつた問はれなかつた。告められなかつた。

尤なる者、優れた者、源頭、みなもと。



近松門左衛門(坂内青嵐筆)

の武士化を促した上に、近世のいはゆる通俗文藝の功の多い事は、固より言ふまでもあるまい。巢林子の如き、この方面に於ても、蓋しその尤なる者である。彼は新淨瑠璃の源頭に立つ人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成されて、爾後の作者は、一人として彼の直接間接の感化を受けてゐない者はない。極端に言へば、他は悉く模倣追随者である。かうして彼によつて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、殆ど彼以來固定した有様であるが、その中心たるものは、武士道精神に外ならぬ。時代の選び方は、王朝時代であらうと、武家時代であらうと、また場所が我が

時代錯誤
anachronism
の譯。時期や
時代を誤るこ
と。

藝術意識
詩歌、音楽や、
演劇や美術
などの藝術に
對する心の感
覺作用。

功利主義
十八世紀十九
世紀にわたつ
てイギリスの
ベンサムやミ
ルの唱へた倫
理說で、自分
の行為の結果
が最大の幸福
となるのを幸
福とする。主
義と定めらる
て。

國であらうと、外國であらうと、説話の根幹となつてゐる精神は、常に近世武士道精神である。この精神を表現するに、彼は彼のいはゆる「慰み」を目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。天皇であらうと、公卿であらうと、武士であらうと、町人的な性質の一部をもたしめる事を必ず試みてゐる。彼の爲した時代錯誤や、階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくして、彼の藝術上に意識した目的から來た事である。彼はこれくらゐな事を知るだけの歴史上の知識はもつてゐたに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的とした爲に、これを犯す事を辭しなかつたのであらう。この事を教化上から考へてみれば、寧ろ彼の藝術の強みである。彼の藝術意識が、馬琴などの如き儒教風の功利的教訓主義のそれでなかつた爲に、彼の藝術は馬琴物の如き淺膚露骨な教訓物に墮せずに濟んだ。そして教訓物に墮さなかつたところが、教

化上一層有效であつたに相違ない。眞の感化は期待しない所に多くある。文藝も教訓物よりは、却つて教訓物でないものに多くの教化が期待される事が多い。武士道精神を主要内容として、通俗的で受容れ易く、美しい麗しい色と甘い味とを附けられた娛樂的な藝術の形で創作され、作毎に一代の人心を沸かしめたのであるから、その社會教化上の効果の少くなかつた事は、想像するに難くないのである。唯政治家の事業の如く、若しくは學者の著述の如く、その効果を計る尺度のない爲に、世人に看過され易いが、若し此所にこれ等を平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接間接の社會教化上に於ける業績の、いかに偉大なものであつたか、明瞭に知り得られるであらう。

—上方文學と江戸文學—

(一)大正十一年東京至文堂發行。

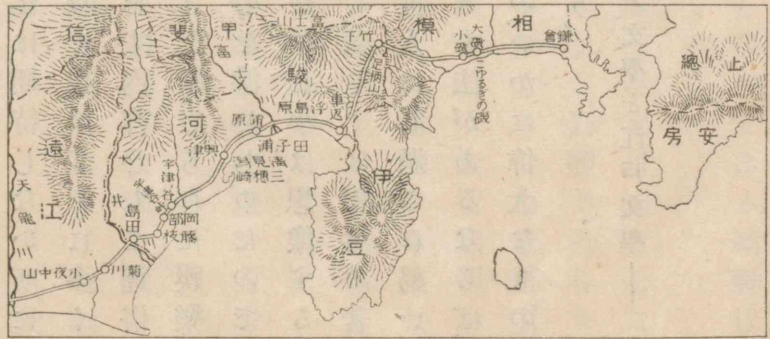
二一 落花の雪

(一)「またや見ん交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙」藤原古今集、藤原俊成
(二)「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」藤原拾遺集、藤原公任

(三)大津市の石場附近、琵琶湖畔の地、琵琶湖そなふる東路の勢多の長橋おともとゞるに「風雅集、平兼盛」

(一) 落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩紅葉の錦を著て歸る、嵐の山の秋の暮、ひと夜をあかす程だにも、旅寝となればもの憂きに、恩愛の契淺からぬ、我がふるさとの妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧て、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞ哀れなる。

憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見わたせば、潮ならぬ海に焦れ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞると踏鳴す、勢多の長橋うち渡



(一)「近江より朝の野に田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は」古今集、大歌所
(二)「白露も時雨もいたく守山は下葉のこらし色つきにけり」古今集、紀貫之
(三)滋賀縣蒲生郡安土村の東南
(四)(五)共に同縣坂田郡

(六)「うちわたす今や汐干にならるみ瀉とよはす」夫木集、常磐井入道
(七)愛知縣尾張國西方にあつた江灣の稱、今星崎の南

り、行交ふ人にあふみ路や、世のうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる路を過行けば、鏡の山はありとて、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧る、ふるさとを雲や隔つらん、番場醒々井柏原、不破の關屋は荒果てて、なほもるものは、秋の雨の、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干に今や鳴海瀉、傾く月に路見えて、明けぬ暮れぬと行く路の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀れと夕暮の、入相鳴



(一) 靜岡縣(遠江國)天龍川の東岸にある古へは西岸にあつた。
 (二) 第八十一代安徳天皇の壽永三年に當る。一八四四年。
 (三) 靜岡縣(遠江國)藤原郡(金山谷と日坂との間の坂嶺)。
 (四) 一年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山(新古今集、西行法師)亭午。
 (五) ながえ(轅)様原郡。
 (六) 第八十五代仲恭天皇の承久三年(一八八九年)。

れば今はとて、池田の宿に著き給ふ。元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の、東夷の爲に捕はれて、この宿に著き給ひにし、その古への哀れまでも、思ひ残さぬ涙なり。旅館の燈かすかにして、雞鳴曉をもよほせば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、其所とも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命なりけりと詠じつゝ、ふたゝび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日既に亭午にのぼれば、餉參らす程とて、輿を庭前にかき止む。ながえをたゝいて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔、南陽縣、菊水、
 汲下流而延齡。
 今、東海道、菊川、
 宿西岸而終命。

池田の宿

松岡映丘筆



(一)今京都市右京區嵯峨にある天龍寺
(二)龍頭鷓首
(三)靜岡縣(駿河國)志太郡
(四)歸りくるほどはなげれど朝露の岡べの眞葛うら枯れにけり(藤原爲家)
(五)駒とめて過ぎざやられぬ清見瀉ちりし花や波の關守(風雅集法橋顯昭)
(六)靜岡縣(駿河國)庵原郡
(七)富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり(新古今集、藤原家隆)

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れやいと
 どまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。
(一)いにしへもかゝるためしをきく川の
(二)おなじながれに身をやしづめん
 大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐
 の山の花盛、龍頭鷓首(三)の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は
 ふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ、島田(四)、藤枝(五)にかゝ
 りて、岡べの眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山べを越え
 ゆけば、つた、楓いと茂りて路もなし。昔業平の中將の、すみかを求む
 とて、東の方に下るとて、夢にも人にあはぬなりけりと詠みたりし
 も、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさ
(六)へ通さぬ波の關守に、いと涙をもよほされ、向ひはいつこ三保ヶ崎、
(七)興津、蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上

なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島ヶ原を過ぎゆけば、汐干や浅き舟浮きて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下路行惱む、足柄山の峠より、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなれれども、日數積れば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

—太平記—

二二 芳宜園大人の靈を祭る

村田春海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをたきて、うなねつきて申さく、あはれ悲しきかも、君は吾に十と言ひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭にも、の學びに行きかひたる時、あしたに參るとしては君の

(一)同縣駿東郡足柄村の地
(二)こゆるぎの磯菜つむらしめらすな沖に波一相模古今集
(三)第九十六代後醍醐天皇の元弘元年(一九九一年)
(四)江戸時代の國學者賀茂真淵に學び、和歌文章を善く藤と共に加藤千八(二四七一年)と稱せられた。文化十六年(一八七六年)歿。
うなねつこのかみ

はかし

おとよえ

世のさが

閑居燈
世の事はそむきはてたる窓のうちに火の花をみすらん春海

ありふる

みはかしのしりへに従ひ、ゆふべにまかるとしては君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとしては吾をおとよえのつらにぞ教へ給ひける。中ごろにして君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎ

不名院
その事ありしに、
なほとて、
火は花をみすらん春海

蹟筆海春田村

つるを、君仕をしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乗り、憂き事もともに憂へ、嬉しき節もともに喜びて、世にありふる業の、まめごとともあだごととも、かたみに隔なく心をかはせること、今にはたとせ。その初めを繰返し數ふれば、相友たることすでに五十とせにぞ

(一) 宋人有耕田者。田中有株。兔走觸株。折頸而死。因釋其耒而守株。冀復得兔。兔不可復得。而身爲宋國笑。
 (二) 楚有涉江者。其劍自舟中墜于水。遽刻其舟曰。是吾劍所從墜也。舟止。從其所刻者。入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。
 (呂氏春秋)

餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にか相見ん、何れの時にかこととはん。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらん。かゝるを誰かはよく堪へん。
 あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下り行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古へに復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機のあやあるみやびごとを尊み言へれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、かれに泥み、こゝにひかれて、なほ怪しみとがむるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、いにしへぶりの歌、世にさかりになりたるなり、その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調新しき姿、とり、に備らざるはなし。その古へを寫せるは藤原、寧樂の御世に及び、後の巧に倣へるは、堀河、鳥羽の御時に

面おこし
 價なき寶

下らず。心に思ふことは口に盡さざることなく、目に觸るゝものは言の葉にのせざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。また事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじと言ひてぞ深く喜びける。然るを今黄金の聲忽ち止みて、玉の響ふたゞび聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、おほかたの世の憂とも言ひつべし。これをいかでか惜しまざらん。かゝるを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。我がかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても遙かに見そなはせとなん申す。

二三 日本文學研究の新意義

藤二村 作

我々日本國民に取つて、生命の糧であり、力であるものは國文學

である。取出しても盡きる事なく、一時代から次の時代へと絶えず我々の内の生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二千年來の國文學である。我々は國文學を知り、國文學に親しむ事に由つて、常に日本國民たる生命を新たにしてい行く事が出来る。眞の日本國民として反省と自覺との機會を與へられてゐる。我々は生れて日本民族である。日本國民である。何としても他の民族ではあり得ない。また他の國民ではあり得ない。それは偶然に日本といふ國土に生れたが爲ではない。日本民族の血を引き、日本國民の生命を生命として享けてゐるからである。血は争ふべからざるものである。血に由つて爲されてゐる國民の結合は無機的結合ではない。有機的結合に成れる國家は機械的な國家ではない。争ふべからざる血は特殊な民族性を作り、民族精神を作り、この民族性、民族精神が有形にまた無形に國家を形成してゐる。我々は日本民族として生きる外に生

くべき途は見出し得ない。而して國家に由つて民族共有の生命の實現に力め、民族精神を世界に擴充する事を圖る事が、我々の個人としてまた國民として生すべき唯一の途である。

國民の文學は國民の精神をさながらに映した鏡である。かるが故にイギリス文學はイギリス國民に取つて最も尊い文學である。フランス文學はフランス國民に取つて最も大切な文學である。ドイツ文學はドイツ國民に取つて最も愛すべき文學である。我々日本國民に取つては、日本文學の外に世界のどこにもより以上に尊い大切な愛すべき文學はあり得ない。我々は自己の生命を他人のに比較して、これを評價する様な自己に冷酷な所爲はしたくない。我が國民精神の表現である國文學を外國文學に比較はしても、その價値の比較には及びたくない。よしそれが低く評價されようと、國文學は我々日本國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難

いものである。我々はその本質を究め、益、これを充實せしめ展開せしめる事に努めればよい、またそれより外に爲すべき途はもたない。我々は、我々に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人、物語作者、隨筆や日記、軍記物等の筆者から、近世の各種様式の文藝の作家たちに心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に、古典文學の筆寫、蒐集、整理、訓點、註釋、批評等の業に従事して、我々に古典文學に親しみ得べき便宜を與へてくれた幾多の國文學者たちにも、同様の敬意を保ちたい。

文學に國境はない様に言ふ人もある。或程度までは承認さるべき事である。しかし、また一面から言へば、民族的、國民的の血の鮮かなものは文學である。國語は國民のうち、にその職能を全うするばかりでなく、その國語を解する者には、外國人も同様に、その職能を盡し得るとは言つても、單語文章のもつ意味はとにかく、その中に

脈打つてゐる全精神を些かの遺漏なく理解し得る者は、その國民を措いては決してあり得ない。かるが故に、イギリス文學はイギリス國民をして研究せしめ、フランス文學はフランス國民をして研究せしめ、ドイツ文學はドイツ國民をして研究せしめるのが最も適當である事に論はないが、民族關係の複雑であり、國際交渉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國民の間に於ては、外國人で他國文學を研究する事も妨ないかも知れない。しかし、我々の様に特殊な民族性を有し、特殊な國家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて、特殊な生活を營んで來た國民の文學、系統を異にした特別な組織をもつてゐる國語に表された文學は、特に國民的の色の鮮かなものである事は言ふまでもない。随つて我が國文學の研究は、獨り我々日本國民のみの爲し得べき業ではあるまいか。我が國民の過去を振返つてみると、アジア大陸地方から支那や

酣醉

印度の先進文化を始めて我が國に輸入したのは、甚だ遠い昔の事である。その時代に於ては、我が國民はまだ素朴の状態にあつたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては、驚異から羨望、崇拜の心を向けて、盛んにこれを輸入し模倣した。内なるものを省て、よくこれをはぐ、みそだてるに違なく、彼に學ぶ事に力めた。制度に於て、服飾、家屋に於て、藝術に於て、彼の影響感化を受けた點は甚だ多かつた。學問、思想、文學に至るまで、追隨と模倣とに力を致してゐた。これが爲に當時の文化は、國民の獨創力の甚だしく缺乏したものとなつてゐた。かくして國家を支配した政治の實權は、貴族階級へ移り行き、王朝時代、武家時代と變り行つたが、外國崇拜の精神は絶えず續き、拜外の迷夢は依然として國民の間に覺めなかつた。偶、江戸時代に至つて、江戸幕府は外國交通の途を杜絶したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は、相變らず拜外の夢に酣醉

提唱

を貪つてゐたが、その時代の精神の中から、ゆくりなく復古を唱道する聲が聞え出した。古へに復れ。といふ聲は、天籟の如く國民の耳朶に響いて來た。復古の精神は昔のまゝの社會を再びこの地上に現さうとする精神ではない。古代の素朴な精神の中に人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに復らうとする精神である。長い年月の間に知らず識らず人間性の眞から離れて來てゐる生活を、自覺的に本來の人間性に引直さうとする精神である。外國、他民族の感化影響の爲に晦まされた民族特有の精神の發揮に返らうとする精神である。古へに復れといふのは、人間本然の性に復れ、民族本然の相に復れといふのである。賀茂眞淵は人間の眞の精神を萬葉に見出して、萬葉の研究、萬葉の和歌を提唱し、實行した。本居宣長は日本人の眞の相を古事記に見出して、古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。

これ等先學の提唱や實行に由つて、拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて、外國の要求に迫られて、已むを得ず當局は鎖國の制を撤廢して、茲に西洋諸國との交通が開かれた。是に於て、西洋文化を我が國民の眼から覆うてゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に眩惑されてしまつた。實際的地位を高め、國力を増進して彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な我が國民は、一千餘年前の國民が爲したと同じ様に、外國文化の輸入模倣に努力した。さうして今日に於ては、最早その點では多く彼に劣る所のないまでに漕著けたのであるが、拜外の精神は對象を異にして盛んに動き始めた。かくて夢から夢へと移り乗つて、今なほこの夢を續けてゐる。この夢の裡に明治も大正も過ぎて、昭和の御代となつた。

世界大戦争は色々の意味で世界の劃期的大事件であつた。この事件に覺醒され刺戟されて起つた改造の機運は、今や世界に充滿して、各方面の改造は今現にその途上にあると見えるのである。西洋文化の真相がこの大事件に由つて遺憾なく暴露されて、これに對する批判の眼が冷やかに輝き始めた。そして明らかにその弱點を認識するに至つたのである。それと共にこれまで多く閑却されてゐた東方文化が、世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的から精神的へ、分析的から綜合的へと學界の推移し行かうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究、日本研究に向ふ傾向は、これを語る事實である。

今や世界國際の關係、國民の交渉は、實に近く且密である。一隅を叩けば他の隅々へ直ちに響を傳へる。我が國に於ても時を同じうして、各種改造運動と共に古典復興、國文學研究の風潮が、どこから

ともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人たちの中から覺めかけて來た。老人たちが無自覺に拜外の鈍い空氣のうちに逡巡して、舊習舊慣の保守に腐心してゐるうちに、却つて若い人たちの中に、自覺的な活動、思索が、色々と起りかけてゐる。改造の聲の裡に、外國の束縛を脱して自國の生命を擴充して行かうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人たちの中でなくて、若い人たちの中心に聞かれる様になつた。新忠君論、新愛國論運動は、若い人たちを中心として起つたものではあるまいか。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意は、確かに若い人たちの中に動き始めたものである。この熱意は、少數専門學者の提唱宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは、若うして西洋文化の研究に功を積んだ人たちの間にかゝる機運の動いてゐる事實に徴しても知る事が出來ると思ふ。

この機運は、これを一言に纏めれば復古精神の勃興である。古へに復れ、日本國民のその元に復れ、外國精神の束縛を脱せよ、といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出して、本居宣長や平田篤胤に繼承されて大いに國民を警醒し、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神と同様の精神である。それが今此所にまた繰返されてゐるものと言へる。江戸時代の復古主義者には、世界知識の狭かつた爲に、固陋な偏見に囚はれた弊があつた。今日の復古精神にはこの如きものを含んではならない。

復古精神は舊い昔の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならない。因襲の世界から本然の世界へ、いびつの世界から正しき世界へ、虚偽の世界から眞實の世界へ歸らうとする精神であらねば

ならない。而してかゝる人間の眞の精神、日本國民の眞の相は、これを古典文學の世界に見出すべく、本然の世界、正しき世界、眞實の世界はこれを文學の中に見出すべきであるから、復古精神には、古典への憧憬、國文學探究の精神の伴なふのを常とするのである。斯様に復古精神の勃興、古典復興の新現象に促されて、國文學の眞の光が次第に世に出でつゝあるの事實を見るのではあるが、なほ我々學徒の爲に遺された未開墾の荒蕪地も少くないし、新考察、新研究に遺された餘地は極めて多いのである。獨り學者研究の餘地が多く遺されてゐるばかりでなく、民衆理解には更に多くの餘地の存する事を思ふのである。専門學者の努力はその方に向つても前途遼遠の感を免れないのである。

帝國讀本新制第二版卷九終

浦野製

大正十四年二月十四日發行
 昭和五年八月十八日發行
 昭和六年七月十一日發行
 昭和九年七月四日發行
 昭和九年十月二十七日發行

帝國讀本新制第二版
 定價
 卷一—四 六拾壹錢
 卷五—八 六拾錢
 卷九—十 五十八錢



有所權作著

編者 芳賀矢一
 訂補者 上田萬平
 同補者 長谷川福平
 發行兼印刷者 東京市神田區神保町一丁目三番地 富山房
 代表者 同所 合資會社富山房社長 坂本嘉治馬
 印刷所 東京市小石川區音羽町七丁目六番地 富山房印刷部

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地 富山房

電話神田二、一七一—二、一七八番 振替口座東京五〇一八番

大正十一年		大正十二年		大正十三年		大正十四年		大正十五年	
姓名	籍貫	姓名	籍貫	姓名	籍貫	姓名	籍貫	姓名	籍貫
田中 一郎	東京	佐藤 三郎	大阪	鈴木 五郎	京都	高橋 次郎	名古屋	山田 四郎	福岡
山田 五郎	東京	佐藤 六郎	大阪	鈴木 七郎	京都	高橋 八郎	名古屋	山田 九郎	福岡
田中 十郎	東京	佐藤 十一郎	大阪	鈴木 十二郎	京都	高橋 十三郎	名古屋	山田 十四郎	福岡
田中 十五郎	東京	佐藤 十六郎	大阪	鈴木 十七郎	京都	高橋 十八郎	名古屋	山田 十九郎	福岡
田中 二十郎	東京	佐藤 二十一郎	大阪	鈴木 二十二郎	京都	高橋 二十三郎	名古屋	山田 二十四郎	福岡
田中 二十五郎	東京	佐藤 二十六郎	大阪	鈴木 二十七郎	京都	高橋 二十八郎	名古屋	山田 二十九郎	福岡
田中 三十郎	東京	佐藤 三十一郎	大阪	鈴木 三十二郎	京都	高橋 三十三郎	名古屋	山田 三十四郎	福岡
田中 三十五郎	東京	佐藤 三十六郎	大阪	鈴木 三十七郎	京都	高橋 三十八郎	名古屋	山田 三十九郎	福岡
田中 四十郎	東京	佐藤 四十一郎	大阪	鈴木 四十二郎	京都	高橋 四十三郎	名古屋	山田 四十四郎	福岡
田中 四十五郎	東京	佐藤 四十六郎	大阪	鈴木 四十七郎	京都	高橋 四十八郎	名古屋	山田 四十九郎	福岡
田中 五十郎	東京	佐藤 五十一郎	大阪	鈴木 五十二郎	京都	高橋 五十三郎	名古屋	山田 五十四郎	福岡
田中 五十五郎	東京	佐藤 五十六郎	大阪	鈴木 五十七郎	京都	高橋 五十八郎	名古屋	山田 五十九郎	福岡
田中 六十郎	東京	佐藤 六十一郎	大阪	鈴木 六十二郎	京都	高橋 六十三郎	名古屋	山田 六十四郎	福岡
田中 六十五郎	東京	佐藤 六十六郎	大阪	鈴木 六十七郎	京都	高橋 六十八郎	名古屋	山田 六十九郎	福岡
田中 七十郎	東京	佐藤 七十一郎	大阪	鈴木 七十二郎	京都	高橋 七十三郎	名古屋	山田 七十四郎	福岡
田中 七十五郎	東京	佐藤 七十六郎	大阪	鈴木 七十七郎	京都	高橋 七十八郎	名古屋	山田 七十九郎	福岡
田中 八十郎	東京	佐藤 八十一郎	大阪	鈴木 八十二郎	京都	高橋 八十三郎	名古屋	山田 八十四郎	福岡
田中 八十五郎	東京	佐藤 八十六郎	大阪	鈴木 八十七郎	京都	高橋 八十八郎	名古屋	山田 八十九郎	福岡
田中 九十郎	東京	佐藤 九十一郎	大阪	鈴木 九十二郎	京都	高橋 九十三郎	名古屋	山田 九十四郎	福岡
田中 九十五郎	東京	佐藤 九十六郎	大阪	鈴木 九十七郎	京都	高橋 九十八郎	名古屋	山田 九十九郎	福岡
田中 一百郎	東京	佐藤 一百零一	大阪	鈴木 一百零二	京都	高橋 一百零三	名古屋	山田 一百零四	福岡

